

41458

教科書文庫

4
810
41-1938
20000 39479

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

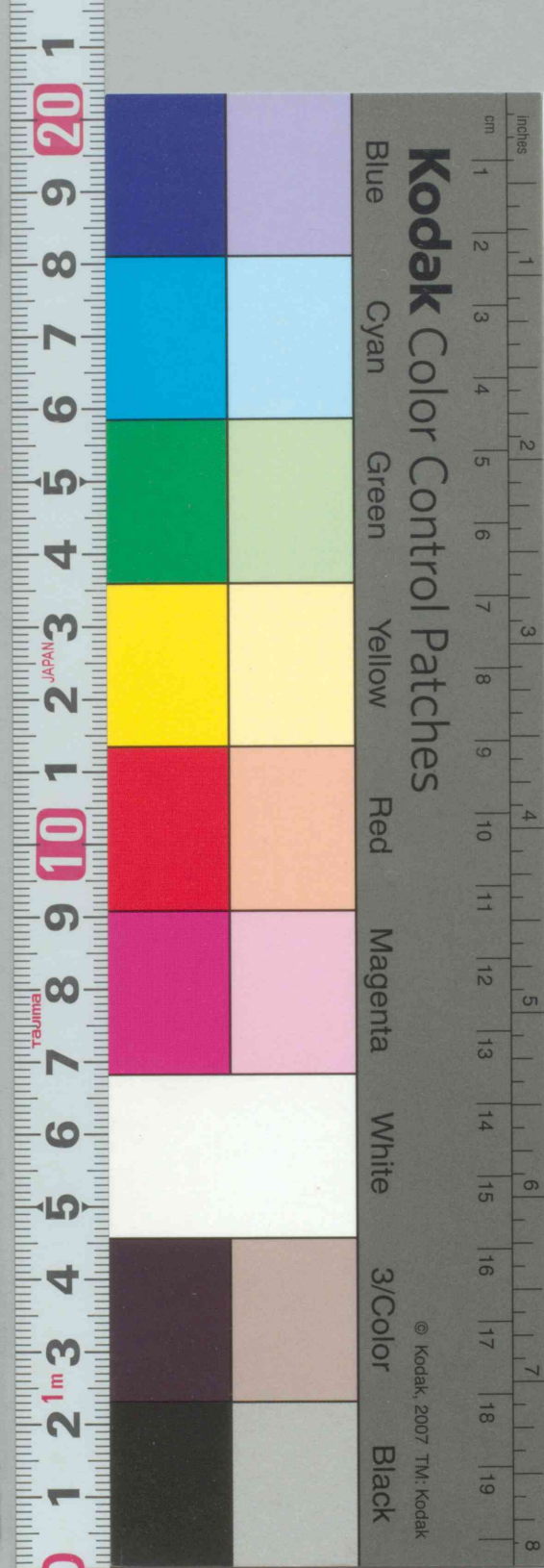


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
T010
資料室

新制國語讀本

新教授要目準據

卷九



375.9
T010

資 料 室

日一月二年三十和昭
濟 定 檢 省 部 文
用科語國校學業實科文漢語國校學中

學習院教授 東條操編

新制國語讀本 卷九

新教授要目準據

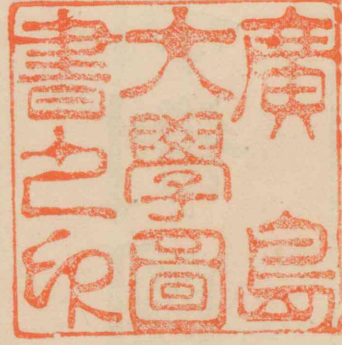
東京 三省堂
大阪

金村尚彦

三德中
第五學年第三學級



(照參課二第) 卷繪子草枕



卷九 目次

一 神祕の日本
二 春は曙
三 愚禿親鸞
四 寸鐵錄
五 吉野の旅
六 花を惜しむ
七 大原御幸

野口米次郎 一
清少納言 九
西田幾多郎 二六
幸田露伴 二〇
本居宣長 二六
村田春海 三五
平家物語 三八

八 松下村塾

○ 徳富猪一郎 四七

九 若き友よ

○ 永井 潛 五四

一〇 光頼卿の参内

○ (平治物語) 六二

一一 青葉

(諸家) 七〇

一二 雅文三篇

村田 春海 七二

一 曇る夜の月を見る

加藤 千蔭 七三

二 泊酒舎に蓮を見る

中島 廣足 七五

三 蚊遣火

(伊勢物語) 七六

一三 東下り

北村 透谷 八一

一四 富嶽の詩神を懷ふ

尾崎 紅葉 八六

一五 佐渡紀行

(増鏡) 九三

一六 新島守

久松 潛一 一〇一

一七 文學の新生

松尾 芭蕉 一一一

一八 笈の小文

蕪村 一二一

一九 天明調

小林 一茶 一二二

二〇 おらが春

阿部 次郎 一二六

二一 生活の中心

(榮華物語) 一三五

二二 法成寺の造營

二三 菅公の大臣
 二四 中古の文學

(大 鏡) 一四〇

一四六

— 目次 終 —

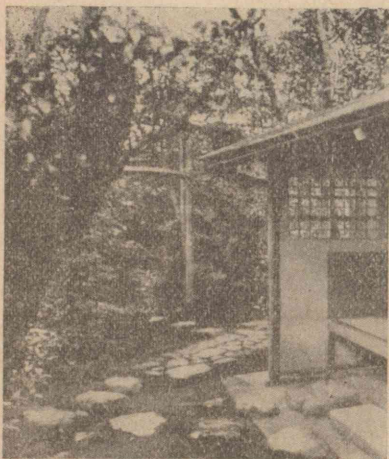


野口米次郎
詩人。愛知縣の
人。明治八年生。

新制國語讀本 卷九

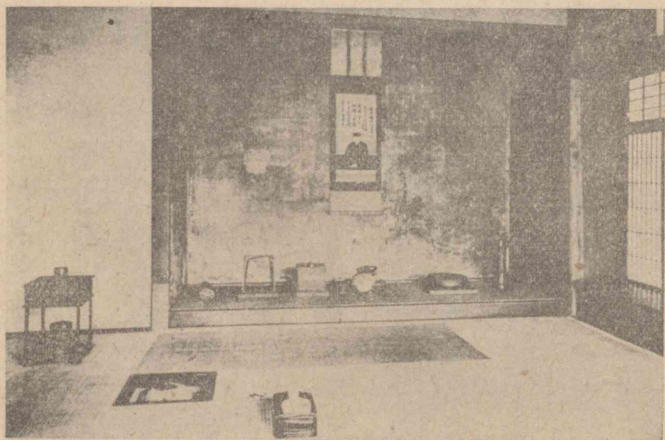
一 神祕の日本

野口米次郎



外人が私の所へ来て、何か日本獨得のものが見たいといふ時、私
 はいつも茶席へ案内する。まづ飛
 石で路がついてゐる所謂露地に立
 たせる。そしてこゝは外面的世界
 を捨てて自己遍照に入る通路だ。
 と説明する。ついで茶席を取巻く
 小さい庭を眺めさせ、幾百年の星霜
 を経て灰色になつてゐる老樹を指

さして、君はこゝに沈黙の祝福があることを感ぜねばならぬ。私ども東洋人はすべての詩の最高潮を寂寞のなかに発見するのだ。寂寞の幽な光に導かれて審美の恍惚に入るのだ。君はそれを理想の聖殿といつても、また唯美の悦樂境といつてもいい。その名前はどうでもいい。……こゝは孤獨に生きる無遍の住む處だ、眞實の個人主義を発見して、そして宇宙の靈に合する處だ。」といふであらう。それから古びた花崗石の燈籠が、聖人か哲人か詩人ででもあるやうに蹲つてゐるその姿に注意させて、この燈籠の心の中には眞理を照す所謂燈臺の灯がある。この光は人に社會の狂瀾怒濤をどうして忘れるかを教へるであらう。又人生の廢墟と塵埃とをどうして脱するかを教へるであらう。どうして私どもが清澄な默禱の雰囲気を作るかを教へるであらう。又どうして茶道に入るかを教へるであらう。」と告げよう。更に私は、茶席の



妙喜庵の茶室

床が地面に接近して低く作られてゐて、私どもが自然を足下から眺めて敬禮することが出来るやうになつてゐる。」と語り、又「茶席の庇が低く作られてゐて、その小暗い空氣は思想や想像を一點に集中させるに便ならしめる。」といふであらう。それから私は彼を茶席の内へ案内して、氣味の悪いくらゐつめたい疊の上にすわらせ、そして「眼を閉ぢて默禱せよ。」と彼に強ひる。彼は私のいふがまゝにする。私はどうだね默想の神祕は君に清淨界を與へたか。君の私どもがこゝに創造しようとする甘い

静な恍惚境に對して、君は何と思ふか。」といつてみると、彼は漠然と微笑を洩らすのみ、一言をも發することが出来ないであらう。なるほど東洋、否、日本の審美觀を理會することが出来る感情の有者でない限りは、大概の外國人は私の言葉を了解することが出来まい。了解することが出来ないのも無理はないと私は思ふ。なぜならば、この茶席即ち茶道で暗示される日本の審美主義は、日本の古文化が極點まで發達したもので、自然と人生とを融和させそれを單純化させた日本人の態度は、彼等外國人がこれまで夢にも見なかつた所のものだからである。故に人が私に、日本で一番特色のあるものは何であるか。」と尋ねたならば、私は直ちに茶席を擧げる、否、茶席を背景とした日本人の審美的態度そのものを擧げるであらう。

私はこゝで、私が嘗て書物で讀んだことのある一つの物語を話

利休

千宗易。千家流
茶道の祖。和泉
國(大阪府)の
人。天正十九年
(一三三)歿、年七
十一。

さう。それは、宗匠利休が太閤秀吉を、朝顔の茶に招待した話である。利休時代には朝顔はいたつて珍しいものであつたことはいふまでもない。利休の庭には朝顔が澤山植ゑてあつたが、太閤が來るとききまつた當日になつて、茶の宗匠利休はその朝顔を悉く切つて捨てさせてしまつた。秀吉はお茶より朝顔の花が見たいので、利休の招待を受けたのであつた。然るに利休の家へ來て見ると、朝顔は一つも彼の眼に觸れなかつた。彼は頗る不興の體で茶席の方へ歩みを進めた。そして利休に、お前の自慢の朝顔は何處に植ゑてあるか。」と詰問した。利休は無言であつた。太閤は更に一層不興の顔を擧めながら茶席に入つて座に着いて、その顔を床の間の方へ向けると、朝顔の花一輪が妖婉な姿をそこに現して居つた。恰も忘れた日光の一片が、床の間に輝いて居るといふやうな工合に見えた。太閤の喜びは非常なものであつたに相違な

光悦 本阿彌光悦。畫家。書家。また刀劍鑑定家。寛永十四年(三九七)歿。年八十一。

宗達 野村宗達。依屋と稱した。畫家。古土佐の風を慕つて一派をなした。能登國(石川縣)の人。寛永二十年(三三三)歿。年六十八。

光琳 尾形光琳。畫家。光琳風の祖。享保元年(三三三)歿。年六十二。

いが、話はさう詳細に渉るに及ばぬ。要は利休が多くの朝顔を庭から取捨てて、たつた一輪の朝顔を生かした點にある。この利休の處置は、實に芳しい藝術的態度であるといはねばならぬ。私は利休を茶人としてよりも寧ろ廣い意味での詩人として敬意を拂ふものである。この態度は九十九枚の繪を焼いて一枚だけを取つて置く美術家の態度である。私は光悦や宗達や光琳はこの態度の人であつたに相違ないと思ふ。庭の朝顔を捨ててしまつた利休の態度は、九十九の作を捨てて一つの發句だけを殘さうとする俳人の態度である。私は確にこの態度こそは日本の永い文化が産んだ最も偉大なもので、優に世界に誇ることが出来るものと信ずる。

床の間の上で一本の草花が歌ふ獨唱に、何たる孤獨の權威があるであらう。この孤獨は感激が靜止した心理状態で、その歌ふ狂

芭蕉 姓は松尾、名は宗房。俳人。伊賀國(三重縣)の人。元祿七年(三三三)歿。年五十一。

新古今集 正しくは新古今和歌集。二十卷。後鳥羽天皇の院宣によつて撰集せられたもの。

定家 藤原定家。新古今集撰者の一人。新勅撰集の撰者。仁治二年(二七二)歿。年八十。

想曲に麗しい抽象的な神祕がある、暗示がある。その中から、精神的雰圍氣が夢のやうに幻のやうに放散せられることを感ずる。獨唱の生活には自己の保全がある、人格の充實がある。私ども日本人の古い文化が産んだ藝術家は、畫家であれ、歌人であれ、又俳人であれ、悉く獨唱的生活の信者であり、又歎美者であつた。その生活の中から、永遠不朽の藝術が生れたのである。

獨唱家なればこそ、利休は偉人であつた、光悦は偉人であつた、芭蕉は偉人であつた。この獨唱的態度から日本の茶席は生れた、繪畫は生れた、俳句は生れた。若し今日の日本にこの態度がなく、又この態度の藝術家が無いとすると、日本の藝術國としての特徴は既に亡びたものである。新古今集にある定家の歌に、見渡せば花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋の夕ぐれ。とあるが、孤獨に生きる無遍的寂寞味は、日本藝術が最高潮に達した場合である。寂

莫のうちに靈の無礙自在を發見して人生の恍惚に入るといふことは、日本人が見出した詩の神祕でなくて何であらう。一度この神祕を失つたが最後、二度とそれを取りかへすことは出来ない。或は變つた神祕を發見するかも知れないが、その時が来るまで詩の上での亡國といはねばならない。

私は亡國民となりたくない。私はどこまでも、私どもの祖先が創造した神祕を握つてゐたい。

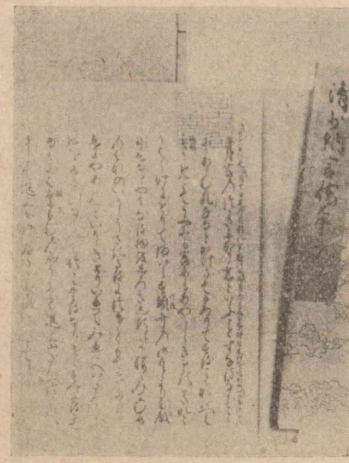
(日本國民讀本)

清少納言
清原元輔の女。
一條天皇の皇后
に仕ふ。生歿年
未詳。

二春は曙

清少納言

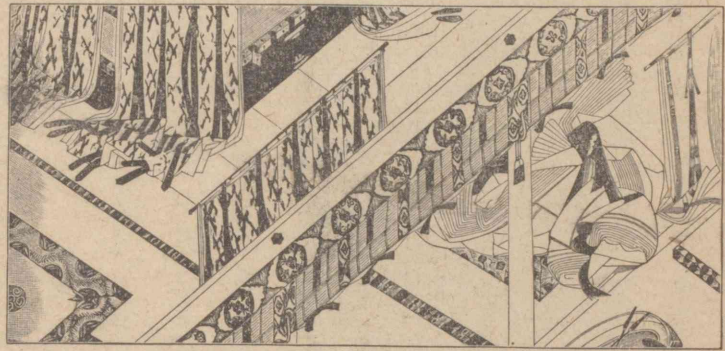
春は曙。やうく白くなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、螢とびちがひたる。雨など



桂の宮本枕草子

の降るさへをかし。秋は夕暮。夕日花やかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど、飛びゆくさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲の音などいとあはれなり。冬はつとめて。雪の降

卯の花



部一の巻繪子草枕

りたるはいふべきにもあらず、霜などのいと白く、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

二

木の花は梅。濃くも薄くも紅梅。櫻の花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花、しなひ長く、色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は、品劣りて何となけれど、咲く頃のをかしう、杜鵑の蔭に隠るらむと思ふに、いとをかし。祭

橘



のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどるなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の上に、白き單がさね、かづきたる、青朽葉などにかよひて、いとをかし。四月の晦、五月朔などの頃ほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より、實の黄金の玉かと思えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露に濡れたる櫻にも劣らず。杜鵑のよすがとさへ思へばにや、なほ更にいふべきにもあらず。

梨の花、世にすさまじくあやしきものにして、目に近く、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひにいふも、げにその色よりして愛なく見ゆるを、もろこしに限りなきものにて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらむとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき句こそ、心もとなくつきたためれ。

樽

落葉喬木。庭園、路傍に栽植す。高さ七、八米に達し樹皮は黒色なり。四、五月頃白色又は淡紫色の花を開く。球形又は橢圓形の核果を實ぶ。



さてなほいみじうめでたきことはたぐひあらじと覺えたり。桐の花、紫に咲きたるは、なほをかききを、葉の廣がりさまうたてあれど、又他木どもと、ひとしう言ふべきにあらず。唐土にことごとしき名つきたる鳥の、これにしも住むらむ、心ことなり。まして琴に作りてさまぐなる音の出でくるなど、をかしとは世の常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。木のさまぞにくげなれど、樽の花いとをかし。枯ればなに様こととに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。

三

「にくきもの。いそぐことあるをりに長ごとするまらうど。あなづらはしき人ならば、のちになどいひても追ひやりつべけれど、も、さすがに心はづかしき人、いとにくし。」
硯に髪の入りに磨られたる。また墨の中に石こもりてきしき

しときしみたる。

「物羨みし、身の上なげき、人の上いひ、つゆばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らせぬをばゑんじそしり、又僅に聞きわたる事をば、われ固より知りたる事のやうに、こと人に語りしらべいふも、いとにくし。」

物聞かむと思ふ程に泣くちご。鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊のほそごゑに名のりて、顔のもとに飛びありく、羽かぜさへ身の程にあるこそいとにくけれ。きしめく車に乗りてありくもの、耳もきかぬにやあらむといとにくし。我が乗りたるは、その車のぬしさへにくし。

物語などするに、さしいでて、われ一人さいまくる者すべてさしいでは、わらはもおとなも、いとにくし。昔物語などするに、我が知りたりけるは、ふと出でて言ひくたしなどする、いとにくし。鼠の

さしあへる

走りありく、いとにくし。
「あからさまにきたる子どもわらはべをらうたがりて、をかしき物などとらするにならひて、常にきて居入りて、調度やうちちらしぬる、にくし。」

四

うつくしきもの。ふりにかきたるちごの顔。雀の子のねずなきするにをどりくる。又へにつけてすゑたれば、親雀の蟲など持て来てくゝむる、いとらうたし。三つばかりなるちごの急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。尻にそぎたるちごの、目に髪のおほひたるを搔きは遣らで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちご

ふり
瓜。
へ
経緒

二藍
染色の名。べに
花と藍とで染め
た色。

のあからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寝入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいとちひさきを、池より取りあげて見る。葵のちひさきもいとうつくし。何もくちひさきものは、いとうつくし。いみじう肥えたるちごの二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍のうすものなど、衣ながくてたすきあげたるが、這ひ出でくるもいとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをこの、聲幼げにて文よみたる、いとうつくし。鶏の雛の足高に、白うをかしげに、衣短なるさまして、ひよくとかしがましく鳴きて、人の後に立ちてありくも、又親のもとに連れだちありく、見るもうつくし。雁の子。舍利の壺。瞿麥の花。

(枕草子)

西田幾多郎

文學博士。哲學
者。京都帝國大
學名譽教授。石
川縣の人。明治
三年生。

親鸞
淨土真宗の開
祖。弘長二年二
三月寂。年九十
七。

三 愚禿親鸞

西田幾多郎

余は真宗の家に生れ、余の母は真宗の信者であるに拘らず、余自身は真宗の信者でもなければ、また真宗に就いて多く知るものでもない。たゞ上人が在世の時、自ら愚禿と稱し、此の二字に重きを置かれたといふ話から、余の知る所を以て推すと、愚禿の二字は能く上人の人となりを表すと共に、真宗の教義を標榜し、兼ねて宗教そのものの本質を示すものではなからうか。

人間には智者もあり、愚者もあり、徳者もあり、不徳者もある。併し、いかに大なりとも、人間の智は人間の智であり、人間の徳は人間の徳である。三角形の邊はいかに長くとも、總べての角の和が二直角に等しいといふには何の變りもなからう。たゞ翻身一回、此の智、此の徳を捨てた所に、新たな智を得、新たな徳を具へ、新たな生命

コペルニクス

現在の天文學の
開祖。プロシヤ
の人(西紀一五七
一—一五九六)

トレミ

西紀二世紀の前
半ごろのアレキ
サンドリヤの
人。天文學者。地
理學者。數學者。

融禪師

法融禪師。唐代
の高僧。四祖大
師に攝せられて
牛頭山法といふ
一派を開いた。

牛頭山

支那江南の潤州
に在る牛頭山幽
棲寺といふ禪
寺。

四祖大師

道信。支那の禪
宗第四世の祖。

に入る事ができるのである。是が宗教の神髓である。宗教のこ
とは世の所謂學問知識と何等交渉もない。コペルニクスの地動
説が眞理であらうが、トレミの天動説が眞理であらうが、さういふ
ことは何方でもよい。徳行の點から見ても、宗教は自ら徳行を伴
ひ來るものであらうが、また必ずしも此の兩者を同一視すること
は出來ぬ。昔、融禪師がまだ牛頭山の北巖に棲んでゐた時には、色
色の鳥が花を啣んで供養したが、四祖大師に參じてからは、鳥が花
を啣んで來なくなつたといふ話を聞いたことがある。宗教の智
は智そのものを知り、宗教の徳は徳そのものを用ひるのである。
三角形の幾何學的性質を究めるには、紙上の一小三角形で澤山で
あるやうに、心靈上の事實に對しては、英雄豪傑も匹夫匹婦と同一
である。たゞ眼は眼を見ることが出來ず、山にある者は、山の全體
を知ることが出來ぬ。此の智、此の徳の間に頭出頭没する者は、此

の智、此の徳を知ることが出来ぬ。何人であつても、赤裸々たる自己の本體に立返り、一たび懸崖に手を撒して絶後に蘇つたものでなければ、之を知ることが出来ぬ。即ち深く愚禿の愚禿たる所以を味はひ得たもののみ之を知ることが出来るのである。上人の愚禿はかくの如き意味の愚禿ではなからうか。他力といはず、自力といはず、一切の宗教は此の愚禿の二字を味はふに外ならぬのである。

併し、右の様にいへば、愚禿の二字は獨り眞宗に限つた譯でもない様であるが、眞宗は特に此の方面に着目した宗教である、愚人、悪人を正因とした宗教である。絶対的・愛絶對的・他力の宗教である。いかなる愚人、いかなる罪人に對しても彌陀はたゞ汝の爲に我は粉骨碎身せりといつて、之を迎へられるのが眞宗の本旨である。歎異抄の中に上人が、彌陀の五劫思惟の願をよくく、案ずれば、ひ

彌陀 阿彌陀如來の略。無量光及び無量壽と譯す。
歎異抄 書名。一卷。後眞宗の安心を示したるもの。

とへに親鸞一人がためなりけり。」といはれたのがその極意を示したものであらう。

終りに宗祖その人の人格に就いて見ても、彼の日蓮上人が意氣冲天、他宗を罵倒し、北條氏を目して、小島の主等が云々」と壯語したのに比べて、吉水一門の奇禍に連り、北國の隅に流されながら、若し我配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん。」といつて、法を見て人を見なかつた親鸞聖人の人格は、頗る趣を異にしたものと謂はねばならぬ。風號び雲走り、怒濤朝天の間立つて、動かざること巖の如き日蓮上人の意氣も壯んなことは壯んではあるが、煙波渺茫、風靜に波動かざる親鸞聖人の胸懷は、また何となく奥床しいではないか。

(思索と體驗)

吉水一門

東山の吉水で淨土宗を説いた源空即ち法然上人の門弟たち。
北國の隅に云々 親鸞は承元元年(一六七)越後國(新潟縣)に流され五年目に漸く赦された。

四寸鐵錄

幸田露伴

幸田露伴
名は成行、文學
博士。文學者。
東京市の人。慶
應三年(西曆一
一三二)生。

一

「多く言ふことなかれ。汝が言と汝が心とこれ一ならば、汝終に舌頭に跳り舞ふ底の傀儡となるべし。汝が言と汝が心とこれ別ならば、汝が家裏の兒驕り母嗟するの悪光景を見るに堪へざらむ。舌に従つて意動かば、芭蕉葉闊くして風にその幹を折らるゝ時あらん。意を奉じて舌ひるがへらば、鷄鳴狗盜の客を用ふるもの、畢竟英雄にあらじと罵られむ。」と、これ一説なり。

二

「多く言ふことなかれ、多く言ふことなかれ。意を傳ふる何ぞ必ずしも三寸の醜物を須ひむ、張儀の功を成せるは、巨口を張開して

張儀
洛陽(今の河南
省河南府)の人。
春秋戰國時代に
連衡を説いた。

蘇秦
魏の人。張儀と
同時代に、合従
を諸侯に遊説し
た人。

吾舌猶在りやと云ひしところにあつて、秦王面前に唇動き舌鼓せるのところにあらず。蘇秦の功を成せるは、機杼の音を聞きて俯首一番せしところにあつて、趙王殿裏に疾呼し絮説せるのときにあらず。」と、これ亦一説なり。

三

「沈黙は愚人の甲冑なり。奸者の城塞なり。明白々の心地、温煦煦の胸郭ならば、千言萬語すとも何の不可あらん。債鬼を恐るゝものは門を閉づる堅く、悪事を構ふるものは窓を開くを忌む。」と、これ亦一説なり。

四

「大丈夫坐すれば須らく孤峯の空に聳ゆるが如くなるべし。臥

さば須らく長江の野に横たはるが如くなるべし。語は雷の鳴るが如く、黙は水の凍るが如くなるべし。」と、これ亦一説なり。

五

「老将は兵を談ぜず。良賈は深く藏す。言多きものは卑しとせられ語少きものは憚らる。言をもつて招くは無言をもつて招くに如かず、語をもつて斥くるは無言をもつて斥くるに如かず。桃李そもく、何を言ひて自ら蹊を成せるや。宗廟そもく、何を語つて人敢て瀆さざるや。」と、これ亦一説なり。

桃李云々
「桃李不言、下自成蹊。」
〔史記、李將傳〕

六

「言を放つ固より舌を抜かるゝを辭せず。人を屠る何ぞ身の亡ぶるを惜しまん。酒を喫すれば錢を費し胃を傷ふ。加減乗除し

盤古氏

支那に於て天地萬物の祖であるといはれてゐる。

〔述異記〕

去るに三も無く四も無く、六も空しく七も空し。好快活、風蒼穹を渡り、濤大洋に騒ぐといへども、空に纖塵をも増さず、水に一滴をも減ぜず。汝語り汝黙す、依然としてこれ汝。我語り我黙す。依然としてこれ我。火は潤さず、水は焚かず、盤古氏以來人間奇事なし、汝詐らざれば語も亦好し、黙も亦好し、我欺くべくんば語も亦非、黙も亦非ならん。」と、これ亦一説なり。

七

「言ふ能はざるを言ひ、濟す能はざるを濟さんとする者、これ大味者、これ大仁者、これ大痴者、これ大勇者、これ大愚者、これ大智者なり。憐むべし千古の好漢、たゞ大味、大痴、大愚たらざらんことを懼るゝのみ。何の暇あつてか語黙の間の小損小益を計較するを事とせんや。」と、これ亦一説なり。

「眞個にこれ好漢ならば自己の言を愛せざるべからず。自己の言をすら猶且愛し得ずんば、如何ぞ士を愛し民を愛するを得ん。眞個にこれ毒漢ならば必ず自己の言を愛せざるべし。自己の言をすら猶且愛せざるを得ずんば、如何ぞ骨肉を殺し天下を瞞くを得ん。かくの如く觀來れば世上多少の半英雄皆これ好漢にもあらず、毒漢にもあらずして、一半茶一半酒的、没用の濁水を盛れる臭皮囊に過ぎず。」と、これ亦一説なり。

「得んと欲するは失はざらんと欲するに如かずと。これ愚説なり。生を期するにあらずんば誰か生を賭せんや。得失利害の説

遂に明らめ難きなり、この故に勇士は得失を言はず、君子は義を取つて利を計らず。」と、これ亦一説なり。

「無禮なる朋友は無用の長物なり。人多ければ事敗れ、樹多ければ果小なり。人ますく、多ければ語々相反して怒を生じ互に傷つく、樹いよく、多ければ枝々相摩して火を發して共に焚く。故に樹を栽うる度あり。人を待つ禮あり。樹を栽うるは接近に過ぐるを忌み、人を待つは狎昵に過ぐるを嫌ふ。接するものは伐るべし。狎るゝ者は遠ざくべし。樹は光を樹より奪ひ、人は生を人より偷む。たゞ度あり禮あらば互に相長じ互に相助くるに足る。言は禮の聲なきなり、禮は言の形あるなり。言にして禮に違はば殆い哉。」と、これ亦一説なり。

本居宣長

號は鈴の屋。國學者、伊勢國(三重縣)松阪の人。享和元年(西曆一八一二年)七月十二日歿。

八日

明和九年(西曆一七九二年)三月

初瀬

大和國(奈良縣)磯城郡に在る。

多武峯

磯城郡に在る山。

上市

大和國(奈良縣)吉野郡。吉野川の北岸。

飯貝

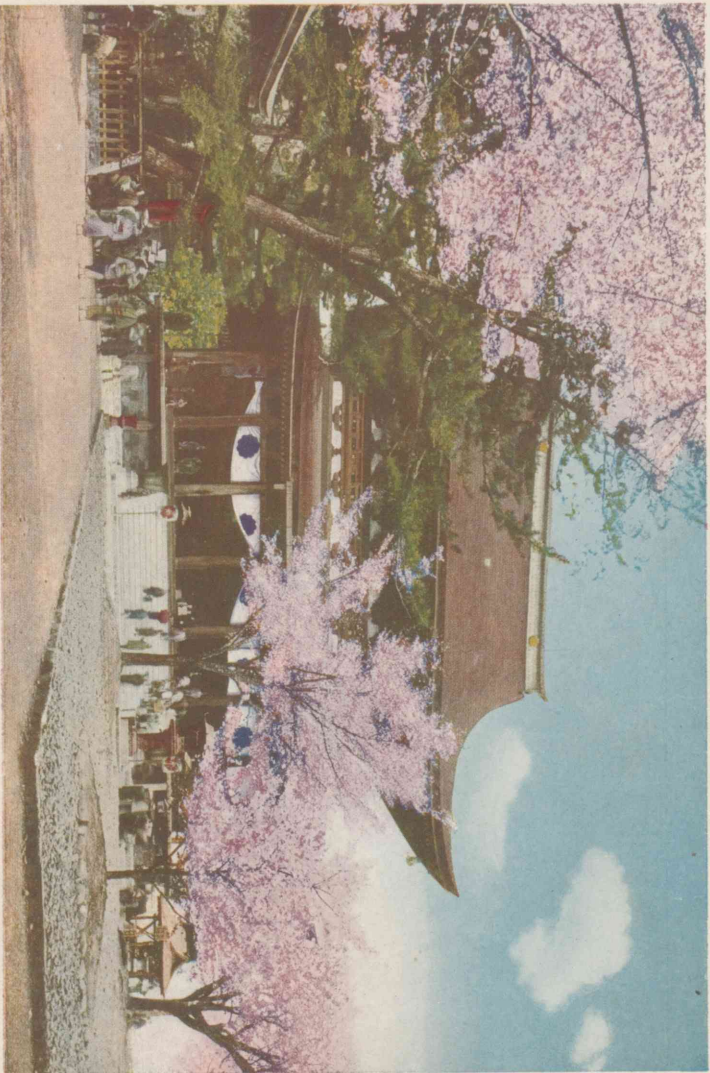
上市の南岸に在る。

五吉野の旅

本居宣長

八日。初瀬を出でし後雨ふらで、四方の山の端もやうくあかり行きつゝ、多武峯のあたりにては名残もなく晴れたりしを、今日もまたいとよき日にて、吉野も近づきぬれば、けさはいと足かるく、皆人の心行く路なればにや、程もなく上市に出でぬ。この間は一里とこそ言ひしか。いと近くて、半里にだにも足らじとぞ覺ゆる。吉野川、ひまもなく浮べるいかだをおし分けて、こなたの岸に船さしよす。夕暮ならねば渡守は、「はや」とも言はねど、皆急ぎ乗りぬ。

あなたの岸は飯貝といふ里なり。さて川邊に沿ひつゝ、少し西に行きて、丹治といふ所より吉野の山口にかゝる。稍深く入りもて行きて、杉むらの中に四手掛の明神と申すがおはするは、吉野の



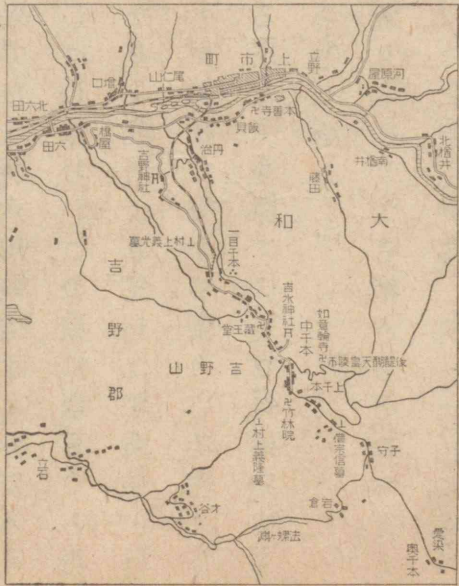
吉野山藏王堂

心づきなし

山口神社などにはあらぬにや。されど、さいふばかりの社とも見えず。この森より下にも上にも、このわたりなべて櫻のいと多かるなかを、のぼりく／＼て、のぼり果てたる所、六田むだの方よりのぼる路との行き合ひにて、茶屋あり。しばし休む。この屋は、過ぎこし坂路よりいと高く見やられし所なり。此所より見わたす所を一目千本とか言ひて、大方吉野のうちにも櫻の多かる限りとぞ言ふなる。げにさもありぬべく見ゆる所なるを、誰てふをこの者か、さる卑しげなる名は附けけむと、いと心づきなし。

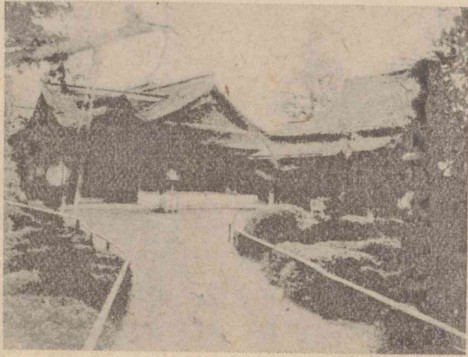
花は大方さかり過ぎて、今は散りのこりたる梢どもぞ、むらぎえたる雪のおもかげして、ところ／＼に見えたる。抑、この山の花は、春立てる日より六十五日に當るころほひなむ、何れの年もさかりなると、世にはいふめれど、また我が國人の來て見つるどもに問ひしには、かのあたりのさかりの程を見て、此所にも、のすればよき程

ぞと、これもかれも言ひしまゝに、その程うかゞひつけて出で立ちしもしるく、途すがら問ひつゝ、來しにも、よき程ならむと、多くは言ひつる中に、まだしからむとこそ言ひし人もありしか。かくさかり過ぎたらむとは、かけても思ひ寄らざりしぞかし。尙此所にてくはしく問ひきけば、この二月のつごもりがた、いとあたたかなりしけにや、例の年の程よりも今年はいと早く咲き出で侍りつるを、いにし三日、四日ばかりや、さかりとは申すべかりけむ。さも雨しげく、風吹きなんどせし程に、誠にさかりと申しつべき頃も侍らぬやうにてなむ、うつろひ侍りにし。」と語るを聞



藏王堂
吉野、金峯山の鎮守。金剛藏王權現を祀つてある。

吉水院
藏王堂の近くに在る。白鳳年中(三三三)言行(三三三)言行者役小角山上修行の庵室であつたと云ふ。後、吉野朝の遺跡となり、今吉水神社となつてゐる。



吉水神社

けば、その年々の寒さぬるさにしたがつて、遅くも疾くもある事にて、必ずその程と、かねてはこの里人もえ定めぬわざにぞありける。此所は吉野の里に入る口にて、これよりは町屋たちつゞけり。先づやどりをとらむとて、藏王堂にはまゐらで過ぎゆく。堂はあなたに向ひたれば、かの門はうしろの方にぞ立てりける。そのあたりには清げなる家たづねて、宿を定めて、先づしばしうちやすみ、もの食ひなんどして、今日明日の事ども語らひ、道しるべき者やとひて、先づ近きところへを見めぐらむとて出で立つ。この借りつる宿は、箱やの何がしかいふ者の家にて、吉水院近き所なりければ、先づまうづ。この院は路より左へいさゝか下りて、

またすこし登る所離れたるひとつの丘にて、めぐりは谷なり。後醍醐のみかどのしばしが程おはしましし所とて、ありしまゝにのこれるを、入りて見れば、げにもものふりたる殿のうちのたゞずまひよのつねの所とは見えず。かけまくはかしこけれど、

いにしへの心をくみてよし水の

ふかきあはれに袖はぬれけり

かの帝の御像、後村上の帝の御手づから刻みたてまつり給へるとておはしますを、をがみたてまつるにも、

あはれ君この吉水にうつり来て

のこる御影を見るもかしこし

またそのかみの古き御たから物ども數多ありて見けれど、悉くはえしも覺えず。この寺のうちになさゝやかなる屋の前うちはれて見わたしの景色いとよきがあるに立ちいりて、煙ふきつゝ見わ

かの帝
第九十六代後醍醐天皇
後村上の帝
第九十七代後村上天皇

子守の御社

吉野水分峯に在り、子守(籠)明神と云ふ。

たせば、子守の御社の山、向ひに高く見やられて、その山にも、かたへの谷などにも、ひまなく見ゆる櫻どもの、今は青葉がちなるぞ返す返す口惜しき。さは言へど、奥なる花はさかりと見ゆるも猶あまたにて、

みよし野の花は日數もかぎりなし

青葉のおくもなほさかりにて

瀧櫻と言ふもかしこにありと教ふ。

咲きにほふ花のよそめはたちよりて

みるにもまさる瀧の白絲

暮るゝまで見るとも飽く世あるまじうこそ。

さて藏王堂にまうづ。御とばり掲げさせて見たてまつれば、いとものとも大きなる御像の、忿れる御顔して、片御足さゝげて、いみじう怖しきさまして立ち給へる、三柱おはする、たゞ同じ御やうに

御像
金剛藏王の像。

實城寺
實城院とも金輪
王寺ともいふ。

三代のみかど
後醍醐天皇、後
村上天皇、長慶
天皇の三代をさ
し奉るならむ。

勝手の社
勝手神社。忍種
耳命・大山祇命・
久々邇智命・木
花咲耶姬等の諸
神を合祀す。

て、げぢめ見え給はず。堂は南向きにて、縦も横も十丈餘りありとぞ、作りざまいと古く見ゆ。前に櫻を四隅に植ゑたる所あり、四本櫻と言ふとかや。堂の傍らより西へ石の階はをすこし下れば、即ち實城寺じつじやうじなり。本尊の左の方に後醍醐天皇、右に後村上院の御位牌と申すもの立たせ給へり。この寺も前のかぎり藏王堂の方につづきて、後ろも左も右も皆やゝ下れる谷なり。されどかの吉水院よりはやゝ程廣し。この所は、かりそめながら五十年餘りの春秋を経て、三代のみかどの住ませ給ひし御行宮おんかりみやの跡なりと申すはいかゞあらむ。事たがへるやうなれど、をりくおはしましなれどせし所にてはありぬべし。今は堂も何も造りあらためて、そのかみの名残ならねど、尙めでたく心にくきさま、異所には似ず。この寺を出でて、もとの路に歸り、櫻本坊さくらもとばうなどいふを見て、勝手の社はこの近き年焼けぬるよし、今はたゞいさゝかなる假屋におはしま

袖振山

吉野山中の一
峯。勝手神社の
背後に在る。

竹林院

勝手神社の南。
金峯山寺の僧
坊。

高取山

大和國(奈良縣)
高市郡に在る。

龍門の嶽

同國吉野郡龍門
村に在る。

葛城山

大和國(奈良縣)
と河内國(大阪
府)との國境に
在る。

すを、をがみて過ぎゆく。この社の隣に、袖振山とて小高き所に小さき森のありしも、同じをりに焼けたりとぞ。御影山といふもこのつゞきにて、木しげき森なり。竹林院、堂の前にめづらしき竹あり、一つふしごとに四方に枝さし出でたり。後ろの方におもしろきつくり庭あり。其所よりすこし高き所へあがりて、よもの山々見わたしたる光景よ。先づ北の方に藏王堂、町屋の末につゞきて、ものより高く目にかゝれり。尙遠くは多武の山、高取山、それにつづきて、良うしろの方に龍門の嶽など見ゆ。東と西とは谷のあなたに間近き山々あひつゞきて、かの子守の御社の山は南に高く見あげられ、乾いぬみの方に葛城山は、いとくはるかに霞の間より見えたるなんど、すべてえも言はず、おもしろき所のさまなり。

花とのみ思ひ入りぬる吉野山

よものながめもたぐひやはある

暮れなばなげの歌

いざけふは春の山邊にまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは。
(素性法師、古今集)

時うつるまでぞ見をる。行くさき尙見どころは多きに、日暮れぬべしとおどろかせど、耳にも聞き入れず、暮れなばなげの。」 なんとうち誦して、

あかなくにひと夜はねなむみ吉野の

竹のはやしのはなのこのもと

かくは言へど、行くさきのところへも流石にゆかしければ、其所にたてる櫻の枝に、この歌は結び置きて立ちぬ。

(菅笠日記)

村田春海
號は琴後翁、國學者。江戸の人。文化八年(西七)歿、年六十六。

六 花を惜しむ

村田春海

つれぐと降りくらしたる長雨も、やうくはれ間おぼゆるに、かゝるゆふべをたゞにやは過ぐすべき、春のゆくへをもしのばむ、花の名残をも見ばや、いざとて葎生の門おどろかすなるは、我が相思ふ人々なりけり。さるはいづこの心ゆくかたならむといふに、かしこの御館こゝの御園生、このごろのけはひ如何に見所あらむといふもあり。又なにの山里、その川面、なほ散り残る蔭をや尋ねましたもいふを、いでかのやむごとなききはの塵もするじとおきてたらむは、春風の心もたどらで、あながちに朝夕かき拂ひなぞするが、所につけてはめやすきわざとも見ゆべけれど、かへりては情おくるゝかたやいかでなからむ。又かの世離れたるあたりは、暮れゆく春のあはれもさこそ多かめれど、霞へだつる道のそ

羽生田、
名は貴良。

かくれがの庭の
芝草いろそひて
露のどかなるは
るのあめかな

島好
庭内に數寄をこ
らすこと。
なづなの花



らもいとほるかなるを暮れかけてはなごか思ひたゝむ。さらば
われも人も相むつばへる羽生田のぬしの住居こそゆかしけれ。

かくれがの庭の芝草いろそひて

露のどかなるはるのあめかな

蹟筆海春田村

いざたまへとてうちつらねて行くに、所せきちまたの塵は、たゞ中
垣の一重をへだてなれど、やゝ奥まりてのどかなる方をしめつれ
ば、木立もの古りて、霞のたゞずまひたゞならず、ましてあるじは古
のみやびしたふ人にて、なべて世の島好しまごのてふ人の心ならひは學ば
で、たゞおのづからなる山里の有様をうつしたれば、はひりの方を
ばさながら畑につくりなして、なづなの花など露にうち亂れたる、

今日來ずば云々
「今日來ずば明日
は雪とぞ降りな
まし消えずはあ
りとも花と見ま
しや。」
(業平朝臣、古
今集)

年にまれなる云
云

「あだなりと名に
こそたてれ櫻花
年に稀なる人も
まちげり。」
(よみ人知ら
ず、古今集)

いとつきぐし。垣根を廻りては、田所廣くうちかへして、堰きい
れたる水いと清らなるに、蛙の時知りがほに聲たてたるもをかし
く、畔傳ひの道かたぐにわかれたるには、花の木どもわざとなら
ず植ゑわたせり。さるは夕日にもてはやされたる色香の、雨のな
ごりおぼえて、心ありげに散り残れる、今日來ずばとぞ見えたる。
あるじは待ちよるこべるけはひしるくて、年にまれなるなど口ず
さみつゝ風を待つ間の木の下におりゐて打語らへば、おのづから
うき世に遠き心地せらるゝを、誰かは市の傍かたへとは思はむ。かくて
家路をさへ忘れぬべし。日入りはつれば、時にかへる鳥の音もわ
かれををしみ顔にきこえ、入相の聲かすかにつたふるも、春を閉ぢ
むるこゝちして、夕やみの空も猶ふりすてがたしや。

かくながら花の木かげに月待ちて
いざもるとともに散るまでは見む (琴 後集)

七 大原御幸

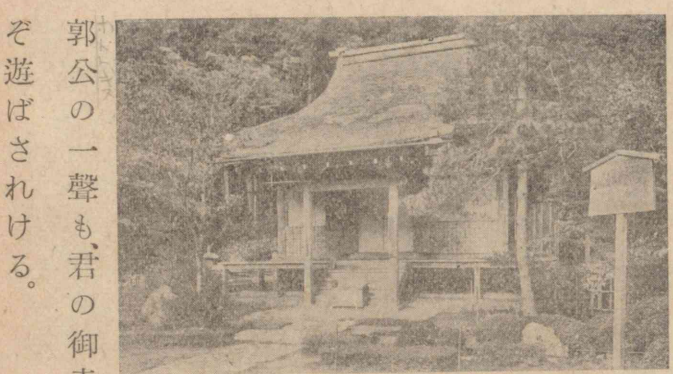
平家物語

平家物語 十二卷 作者末
 詳。平家一門の
 興亡を叙した軍
 記物語。
 法皇 後白河法皇。建
 久三年(八三三)崩
 御。建禮門院
 名は徳子。平清
 盛の次女。高倉
 天皇の中宮。安
 徳天皇の御母。
 北祭 賀茂の祭のこ
 と。陰曆四月申
 の酉の日に行は
 れる。
 大原 山城國(京都府)
 愛宕郡大原村
 清原深養父
 歌人。延喜(美)
 一五二頃の人。
 補陀落寺 山城國(京都府)
 愛宕郡に在った
 寺。
 皇太后宮 後冷泉天皇の皇
 后。關白藤原教
 通の女。御名歡
 子。

かゝりし程に法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居
 の御住居御覽ぜまほしう思しめされけれども、二月彌生の程は、嵐
 烈しう餘寒もいまだ盡きず、嶺の白雪消えやらで、谷のつらゝも打
 解けず。かくて春過ぎ、夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめ
 て大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々
 には徳大寺花山の院、土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候
 ひけり。鞍馬通の御幸なりければ、彼の清原の深養父が補陀落寺、
 小野の皇太后宮の舊跡叡覽あつて、それより御輿にぞ召されける。
 遠山に懸る白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、
 春の名残ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日餘りの事なれば、夏草の
 茂みが末を分け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じなれた

る方もなく、人跡絶えたる程も思召し知られて哀れなり。

西の山の麓に一字の御堂あり、すなはち寂光院これなり。古う



寂光院本堂

造りなせる泉水木立、よしあるさまの所
 なり。葦破れては霧不斷の香を焼き、扉
 落ちては月常住の燈を掲ぐとも、かやう
 の所をや申すべき。庭の若草しげりあ
 ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漾ひ、
 錦をさらすかとあやまたる。中島の松
 にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青
 葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の
 山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より山
 郭公の一聲も、君の御幸を待顔なり。法皇これを叡覽あつて、かく
 ぞ遊ばされける。

寂光院 山城國(京都府)
 山城國(京都府)
 愛宕郡大原村に
 在る。聖徳太子
 の開基。

五戒十善

殺生偷盜

邪淫妄語

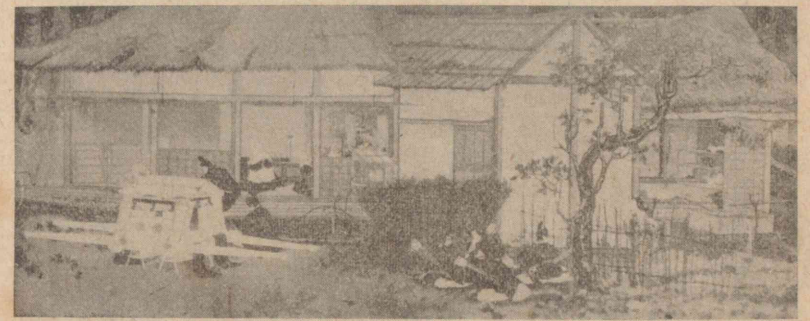
飲酒

兩舌惡口

綺語貪欲

瞋恚邪見

悉達太子
釋迦出家前の
名。悉達多。中
印度カピラ王國
淨飯王の太子。



七 大原御幸

四二

御果報の盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行になじかは御身ををしませ給ひ候べき。因果經には、『欲知過去因、見其現在果。欲知未來果、見其現在因。』と説かれたり。過去未來の因果をかねて悟らせ給ひなば、つやく御歎きあるべからず。むかし悉達太子は、十九にて伽耶城を出でて、檀特山の麓にて、木の葉を連ねて肌をかくし、峯に上つて薪を採り、谷に下つて水を掬ひ、難行苦行の功によつて、終に成道正覺し給ひき。』とぞ申しける。此の尼の有様を御覽すれば、身には絹布の

(筆山觀村下) 幸

故少納言
藤原通憲。鳥羽
崇徳。近衛の三
天皇に歴仕し
た。

わきも見えぬものを結び集めてぞ着たりける。あの有様にても、かやうの事申す不思議さよと思召して、抑、汝は如何なる者ぞ。』と仰せければ、此の尼さめくくと泣いて、しばしは御返事にも及ばずやゝあつて涙をおさへて、申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ。』とて、袖を顔に押當てて忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇、げにも汝は阿波の内侍にこそあなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢とのみこそ思召せ。』とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、各、感じあはれける。さてかなたこなたを觀覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝ

七 大原御幸

四三

三尊
阿彌陀佛
觀音
勢至

先帝 安徳天皇 第八十一代
八軸の妙文 法華經
九帖の御書 善導の觀無量壽經疏
淨名居士 維摩詰のこと 釋迦と同時代の人
定基 法名は寂昭。長保四年(六三二)入宋し、長元七年(六三九)彼の地で歿した。

りつゝ外面の小田も水越えて、鳴立つひまも見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の畫像、右に善導和尚、並に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。かの淨名居士の方丈の室の内に、三萬二千の床をならべ、十方の諸佛を請じ給ひけむも、かくやとぞ覺えける。障子には、諸經の要文ども色紙に書いて、ところへにおされたり。其の中に、大江の定基法師が清涼山にして詠じたりけむ、笙歌遙聞孤雲上。聖衆來迎落日前。」とも書かれたり。少しひきのけて、女院の御歌とおぼしくて、

思ひきや深山の奥にすまひして
雲居の月をよそに見むとは

さてかたはらを叡覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の御衾などかけられたり。さしも本朝漢土の妙なるたぐひ數を盡し、綾羅錦繡の装ひもさながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人もまのあたり見奉りし事ども、今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。

やゝあつて、上の山より、濃き墨染の衣着たりける尼二人、岩の懸路を傳ひつゝ、おり煩ひたる様なりけり。法皇、あれはいかなる者ぞ。」と仰せければ、老尼涙を押へて、花筐臂にかけ、岩つゝ、し取具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせ給ひ候。爪木に蕨折り添へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實が女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の典侍の局。」と、申しもあへず泣きけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、みな袖をぞ濡されける。女院は世を厭ふ御習とはいひながら、今かゝる有様を見え參らせ

むずらむ恥かしさよ消えも失せばやと思召せどもかひぞなき。
宵々毎の鬨伽の水掬ふ袂もしをるゝに、曉おきの袖の上、山路の
露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけむ、山へも返らせ給はず、又御
庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせまし、くたる所に、
内侍の尼参りつゝ、花筐をば賜りけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。早々御見参あつて、還御なし
参らせ候へ」と申しければ、女院御涙を押へて、御庵室に入らせお
はします。一念の窓の前には、攝取の光明を期し、十念の柴の樞に
は聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思ひの外の御幸かなとて、御見参
ありけり。

徳富猪一郎

號は蘇峰、思想
評論家。貴族院
議員。熊本縣の
人。東京日日新
聞社員。文久三
年(五三)生。

八松下村塾

徳富猪一郎

吉田松陰は天成の鼓吹者なり、感激者なり。彼自ら己を空しう
して他の善を採るを禁ずる能はざるのみならず、又他をして覺え
ず自己の精神意氣に同化するを禁ずる能はざらしむる力を有す。
これ彼が教育家としての特色なり。其の踏海の策破れて下田の
獄に繋がるゝや、獄卒に説くに自國を尊び、外國を卑しみ、綱常を重
んじ、彝倫を敍づべきを以てし、狼の目より涙を流さしめたり。其
の下田より檻輿江戸に赴き、途三島を經るや、警護の下人に向ひて
大義を説き、人獸相距る遠からざる彼等をして、奮勵の氣色に現れ
しめたり。其の江戸の獄に在る日は、いふまでも無く、後送られて
長門野山の獄に投ぜらるゝや、其の感化は同囚者に及び、獄卒に及
び、遂に其の司獄者までも、彼が門人となるに至らしめたり。彼が

野山の獄
長州萩に在つ
た。

在る所、四圍みな彼が如き人を生ず。これ何に由りて然るか。「薔薇の在る所、土も亦香し。」といふに非ずや。而して、彼が最も其の鼓吹者たり、感激者たる特質を顯したるは、

松下村塾に於て之を見る。



松田吉陰

松下村塾は徳川政府顛覆の卵を孵化したる保育場の一たり。維新改革の天火を燃したる聖壇の一なり。笑ふなかれ、其の火燐よりも微に、其の卵、豆よりも小なりと。赤間關の砲臺は粉にすべし。奇兵隊の名は滅すべし。然れども松下村塾に至りては、獨り當時に偉大なる結果をのこせるのみならず、流風遺韻今に及んで、なほ人をして欽仰歎美の情禁ずる能はざらしむるものあり。

奇兵隊
高杉晋作等の主唱した勤王の一隊。

山鹿流軍學
山鹿素行の創始なる兵學。

玉木
文之進、父の弟、久保母方の叔父。

彼は安政二年十二月、野山の獄より出でて、家に蟄居せしめられたり。而して其の安政三年七月に至つては、蟄居中更に家學を授くる許を得たり。其の名義とする所は山鹿流軍學なりと雖も、其の實は然らず。彼はいはゆる専門的兵法家にあらず。彼は改革家なり。其の教ふる所は改革の精神なり。其の講ずる所は改革の偉業なり。

松下村塾の名は其の内叔玉木、外叔久保等が相接して其の村學に用ひたる所にして、松陰これを襲用したりと雖も、吾人がいはゆる松下村塾に至りては、松陰を推して其の開山とせざるべからず。蓋し松陰が自ら松下村塾に直接の關係を有したるは、僅に安政三年の七月より安政五年の十二月までにして、即ち其の歲月は二年半に過ぎず。而して此の二年半の歲月が、未來に於ける日本の歴史に千波萬濤の激起點となりたるは何ぞや。

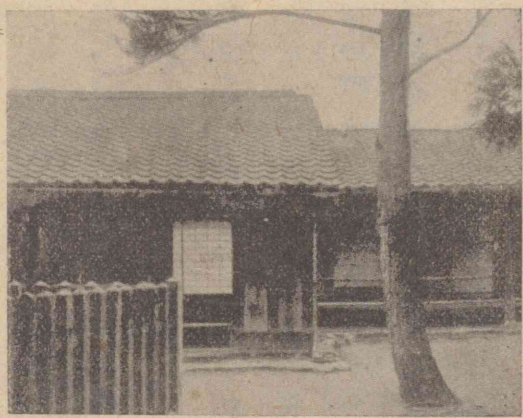
白鹿洞の先生
宋の儒者朱熹を
さす。

橄欖林の夫子
希臘の哲學者
プラトーンをさ
す。

彼は何を以てかくの如き大感化を及ぼしたるか。曰く、其の人にあり。曰く、其の時勢にあり。曰く、其の教育の目的にあり。曰く、其の教育の方法にあり。

彼は精を窮め微に入る白鹿洞の先生に非ず。彼は宇宙を呑み幽明を窮むる橄欖林の夫子に非ず。彼は僅に二十七歳の壯者にして、要するにこれ白面の中書生のみ。彼が實力よりも多くの感化を人に及ぼし、彼が人物と匹敵する、或點に於ては寧ろ彼より優れる弟子を出したるは何ぞ。「感在知己」の一句、これを説明して餘りあるべし。

彼は造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈なり。一たび物に觸



塾 村 下 松

ペスタロッチ
ヨハン・ハイ
ンリッヒ・ペ
スタロッチ。ス
キスの教育
家（西紀七
百八十二）。

着すれば轟然として火星を飛ばす。此の時に於ては、物も亦碎け、彼も亦碎く。彼の全體は燃質を以て組織せられたり。火氣に接すれば忽ち焰と爲る。其の焰と爲るや、銀も鎔かすなり、金も鎔かすなり、石も鎔かすなり、瓦も鎔かすなり。彼の人に接するや、全心を舉げて接す。彼の人を愛するや、全力を舉げて愛す。彼は往々インスピレーションの爲に精神的高潮に上る。而してこれを以て他に接し、他を導いて此の高潮に接せしむ。知るべし、彼が教育の道多岐無し、たゞ己が眞骨頭、大本領を據べて、以て他に及ぼすのみなるを。

彼は變則なるペスタロッチなり。彼は實物教育の大主義を踐行せり。たゞペスタロッチに異なるは、一は天地萬有を以て實物教育の資と爲し、他は活世界の時事を以て實物教育の資と爲したるのみ。其の嬰兒の如き赤心を以て其の子弟を愛し、自ら彼等の仲

軒
輕

間と爲り、彼等の中に住し、彼等の心の中に住するに至りては、二者
豈軒輕あらんや。

彼の門人を遇する、一に赤心を以てす。至誠にして動かざるも
の未だこれ有らずとは、彼が人に接し物を待つ金誠なり。彼は能
く言ふよりも、寧ろ能くこれを行へり。單に此の一點に於ては、東
西古今を通じて彼に優る教育家を見出すこと決して容易の業に
非ず。而して此の精神を以て其の所信を他に施す。故に其の傳
道心に至りては、此の山を彼處に移す程の勢力ありしなり。彼が
眼中、敵も無く、味方も無く、たゞ彼が濟度すべき衆生あるのみ。彼
は社會の寵兒に非ず。彼が子弟も亦然りき。彼等は恰も雪を踏
んでアルプス嶺を攀づる旅客の如し。其の隆凍苦寒を凌がん爲
には、互に負載し、抱擁し、自他の體溫に依りて其の呼吸を保たざる
べからず。艱難は同情を生じ、同情は恩愛を生ず。先生前に斃れ

杉氏
杉百合之助。松
陰はその次男。
出でて吉田氏を
つぐ。

て、弟子後に振ふ。彼は知己の感を以て其の子弟を陶冶せり。彼
は活ける模範と爲りて、子弟に先だちて難に殉ぜり。否子弟の爲
に難に殉ぜり。此の時に於て、懦夫と雖もなほ起つべし。況や平
生の素養ある者に於てをや。況や恩愛の情、知己の感ある者に於
てをや。彼は其の子弟に向つて我が如くなせといへり。而して
なせり。彼等豈徒然として止まんや。

其の時を以てすれば、二年半に滿たず、其の處を以てすれば、萩城
の東郊に在る杉氏邸内の八疊の矮屋にして、其の特に増築したる
ものも、別に十疊半の一室を加へたるに過ぎず。しかも此の中よ
り無数の活劇と、活劇を爲しし大立者とを出したる所以のもの、豈
其の由る所無くして然らんや。世或は一人を以て興り、一人を以
て亡ぶ。個人の社會に及ぼす勢力もまた輕視すべからざるなり。

(吉田松陰)

永井潛
醫學博士。生理
學者。廣島縣の
人。東京帝國大
學名譽教授。明
治九年生。

九若き友よ

永井潛

若き友よ。「世界は勇者に屬す。」と云ふ獨逸の格言を知るか。
「人生に於て、心と體の勤勞なくしては、一事の果を結ぶなし。努力
し尙努力する、是ぞ實に人生なる。」と云ふ金言もあれば、天才とは
忍耐のことなり。」と謂ふ名句もある。寔に其の通りである。人
一たび、勇氣の帆を擧げ、努力の權を揮ひ、堅忍の舵を握る時、如何な
る人生の狂瀾怒濤をも乗り切つて、船を確實に成功の彼岸に到達
せしめることが出来るのである。而も此の勇氣も、努力も、忍耐も、
皆剛健鞏固なる意思より生れ出づるものであることを念ふ時、意
思は人格の中心であり、意思即ち人であると云ふことが出来るで
はないか。

若き友よ、剛健なる意思は、如何なる境遇の下にも、絶えず人をし
て前進せしめ、向上せしむるのみである。「叩けよ、さらば啓かれん」
強き意思は、強き冀望を喚び起し、強き冀望は、強き豫想を招來し、強
き豫想はよく可能を變じて、實在となすのである。
傳ふる所によれば、佛蘭西の一青年士官が、予は佛蘭西の元帥た
らんと欲す。大將軍とならんと志す。」と云ひつゝ、部屋を歩むを
常として居たが、後年彼は遂に佛蘭西の元帥となつた。又嘗て、或
指物師が一高官の椅子を特に入念に修覆して居たので、人が偶、そ
の譯を問うた所が、自分が、他日この椅子に掛ける時、快よからんが
爲である。」と答へた。不思議にも彼は、遂にその椅子の主人公と
なつた。

若き友よ。剛健なる意思を有つ者は幸なる哉。彼に在つては、失敗即ち成功であり、困難は最良の師となり、窮乏は最愛の友となるのである。試みに香氣ある草を手にとつて見よ。之を採むこと愈、強うして、其の香氣は益、高くなるではないか。

將軍を試煉するものは、戦勝よりも戦敗である。漢の高祖は連戦連敗して、而も支那を統一し、ワシントンも亦、戦に勝つよりも負けること多くして、而も米國を救うたではないか。人生の戦に於て、一度敗れ、二度敗れ、三度敗れたとて、斷じて失望落膽してはならない。敗慘なくば勝利なく、困厄なくば成功はない。人生の行手に横たはる如何なる障碍も、努力と堅忍とによつて征服せられざるものなしと確信せよ。さうして勇氣を鼓舞せよ。蕁麻は、大膽にこれを擱むとき、絹絲の如く軟らかである。「艱難は神の命令に

漢の高祖
劉邦。項羽と共に秦を伐つて天下を統一した。
ワシントン
アメリカ合衆國第一代大統領
(西紀一七三二—一七九一)

パーク
アメリカの社會學者(西紀一八六〇—一八九一)
「天の將に云々
是人也、必苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身、行拂亂其所爲。」
(孟子)

よつて、我等の上に置かれたる峻嚴なる教師である。神は、親の如き保護者、教誡者にして、我等が我等を知るよりも、尙よく知り、我等が我等を愛するよりも、尙よく愛す。」と云つたパークの言を思へ。「天の將に大任を此の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しましむ。」と云つた孟子の教を玩味せよ。

若き友よ。各人は自ら王者であり、自己の支配すべき王國を有つて居るではないか。其の王國は、即ち自分自身であり、其の支配者は、即ち自由なる意思である。自由と云ふのは、放縱を意味するのではない。たとひ、哲學者や、倫理學者が、何と議論しようとも、我等の意思は、絶對に自由である。水に浮べる浮草の、流れのまにまに、昨日は東、今日は西と云ふ如きものではなく、剛健なる水泳者が、

自らの力によつて勇往邁進し、波を切り、流れに遡つて、己の欲する目的地に到らんとする意味に於て、確に自由である。そして自由は責任を伴ひ、支配は任務を負はしめる。我等は、我等の剛健なる意思を試煉すべく、我が王國を支配しなければならぬ。ソクラテースの言へる如く、世界を動かさんと欲する者は、須らく先づ自己を動かさなければならぬ。」

ソクラテース
アテネの哲學者
(西紀前四七〇—
三九〇)

若き友よ。青年が人生を歩むや、其の路の兩側には、幾多の妖魔が相並んで立つて居る。彼等は或は笑み、或は媚び、或は脅し、或は迫り、あらゆる手段を以て、卿等を試験し、誘惑せんとして居る。一度これに打負ける時、それは永遠の墮落であることを思はなければならぬ。傍目も振らず前進せよ。男らしく、唯男らしく、否を

叫び「否」を實行せよ。一步躊躇せば、一步破滅の淵に近づくことを思はなくてはならない。

幾多の妖魔の中、青年にとつて最も恐るべく惡むべきものは酒である。この惡魔は誰もが其の恐るべきことを知つて居りながら、殆ど誰もが、それから逃れることの出來ない魔手を延ばして、卿等を抱きすくめんとするのである。オヂッセウスが、妖女の歌に耳を覆うて、一心不亂に漕ぎに漕いで、巨巖相撃つて船を微塵に碎くと云ふ恐しい海門を漕ぎ抜けたやうに、非常な勇氣と努力とを以てして、始めて此の恐しい魔手を振りほどくことが出来るのである。唇に當つるに先だつて、勢よく盃を脚下に叩き附けよ。さうして序に、地獄の煙をつぎ込む煙管をも一擲せよ。斯かる時、卿等は、最も大なる敵よりも、尙打勝ち難い自己に克ち得たる、言ひしれぬ歡びを感じるのであらう。

オヂッセウス
ギリシヤの詩聖
ホーマーの敘事
詩「オヂッセウ
ス」の主人公。

地獄の煙
煙草のこと。喫
煙の風が初めて
歐羅巴に入り込
んだ時、當時の
羅馬法王が誠め
て言つた言であ
る。

桃源郷

陶淵明の桃花源記に記されてある理想郷

二宮尊徳

通稱金次郎。經濟家。相模國(神奈川県)の人。安政三年(五二)二月二十日歿。年七十。

文治・建久の昔

今から約一八五〇年ばかりの昔

若き友よ。神は桃源郷に達する迄に、勤勞と困厄との門戸を置いてゐる。二宮尊徳翁の言に、天は萬物を生ずれども、人は自ら勤勞して之を取り、之を作らなければ其の用をなすことが出来ない。それ故に、森林に方材なく、麻畑に織布はない。」と云ふ教訓がある。汗なければ甘味なし。」と云ふ英國の格言がある。努力せよ、努力せよ。努力せずして、人生何の生甲斐があらうぞ。時正に新涼郊墟に入り、神澄み、體蘇らんとして居る。剛健な意思を興起し、旺盛なる元氣を振作する、今よりよき時はないのである。

顧みて果物屋の店頭を見れば、紫水晶の如き甲州葡萄が山をなして輝いて居る。夜深うして、蟋蟀、草雲雀、鈴蟲などの音が、雨の如く滋い。憶へば文治建久の昔、雨宮勘解由が、路傍に山葡萄を見附

徳本

姓は長田。醫家。本草家。三河國(愛知縣)の人。後、武田信虎の客となつて甲斐に留る。寛永七年(三九)歿。

メエーテルリンク

ベルギーの文豪(西紀一八一七)

アンリーフアブル

フランスの有名な生物學者(西紀一八三二—一九五)

けて、栽培を始め、甲斐の徳本が更に之を改良して、遂に今日の隆盛を致したのではないか。メエーテルリンクをして、今の文明世界が有つてゐる至高至純の名譽の一つ、最も正當な意味での、賢明な博物學者の一人、そして又近代の意味での、最も靈妙な詩人の一人だ。」と迄、激賞せしめた、アンリーフアブルは、昆蟲に打込んだ彼の五十年の心血の結晶として、不朽の業績を、昆蟲記として留めたではないか。嗚呼、努力し、努力する、是ぞ人生なる。」而も此の努力は、凡べて剛健鞏固なる意思の中から生れて来る。そしてそれが、眞に人の人たる所以であり、人の貴き力でなくてはならない。

(人及び人の力)

平治物語
三卷、著名未詳、
平治の亂の顛末
を記した軍記物
語。

同じき十九日

平治元年(八七
十二月)

光頼

姓は藤原。權大
納言正二位に進
み、承安三年(一
一三三)歿。

信頼

藤原忠隆の子。

一座

一〇 光頼卿の参内

平治物語

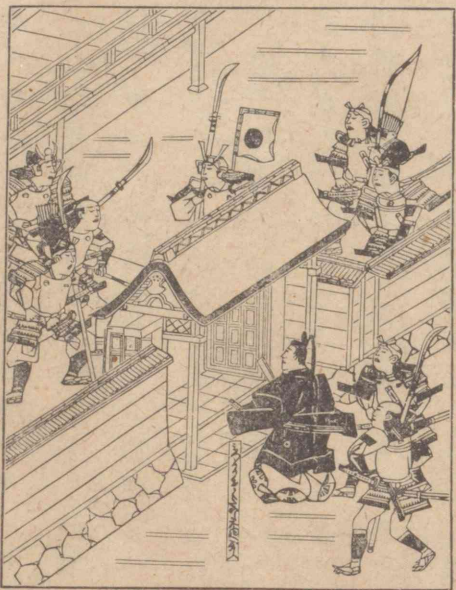
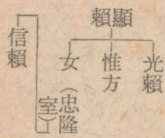
さるほどに内裏には、同じき十九日に公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、このほどは「信頼卿の舉動過分なり」とて不参にておはしましけるが、参内して承らむとて、殊にあざやかに束帶引繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雑色の装束に出で立たせ、自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ」とて、御身近く置き、その外清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張つて、處々門々を固め守護しけるを事ともせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵共も大きに恐れ奉り、弓をひらめ矢をそばめて通し奉る。

紫宸殿の後ろを経て殿上をめぐりて見給へば、信頼卿一座して、

長方

姓は藤原。顯長の子。權中納言に至る。建久三年(一一三三)歿。

母方の舅



光頼卿の参内

その座の上藤達みな下にぞ着かれたる。光頼卿、こは不思議の事かな、人はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には着くまじきものと思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそよにしどけなう見えて候へ。」と色代して、しづくと歩み、信頼卿の上にむずと着き給ふ。光頼卿は、信頼卿の爲には母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、殊に畏れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿、あなあさましと見給ふに、光頼

卿下襲の尻引直し、衣紋繕ひ笏取直し、氣色して、今日は衛府督が一座すると見えて候。召に参ぜざらむ者をば、死罪に行はるべしとやらむ承つて参内する所なり。抑、何事の御諛ぞ。」と問はれけれども、信頼卿物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして兪議の沙汰もなし。程経てつい立つて、「悪しう参つて候ひけり。」とて、しづくと歩み出でられけり。

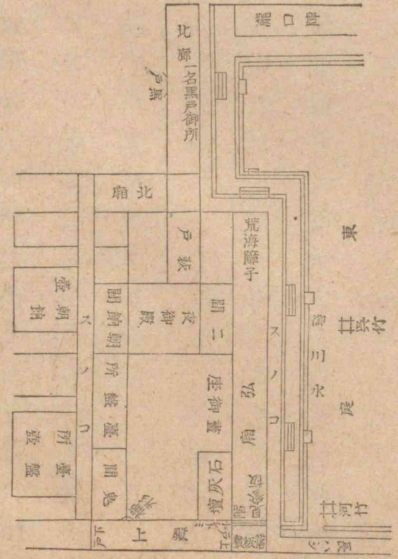
庭上に充ち満ちたる兵共これを見奉つて、「あはれこの殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしませざりつるに、し出したることよ。門を入り給ふより聊も臆したる體も見え給はず。あはれこの人を大将として合戦せば、いかばかりか頼もしからむ。」と申せば、傍らなる者、昔頼光頼信とて源氏の名將おはしませ。その頼光を打返して光頼と名告り給へば、これも剛にましますぞか

頼光
源満仲の長子。英武驍勇、世に冠たり。治安元年(六八)歿。
頼信
頼光の弟。驍勇を以て稱せらる。永承三年(七〇)歿。

し。」といへば、又傍らより、「などその頼信を打返して信頼と付き給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはしませぞ。」といへば、「壁に耳、天に口」といふことあり。恐しく。聞かじ。」といひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。

光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎでも出でられず、殿上の小薔の前、見参の板高らかに踏み鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方

のおはしましけるを招き寄せて宣ひけるは、「公卿兪議とて催されつる間参じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらむ、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人みな當



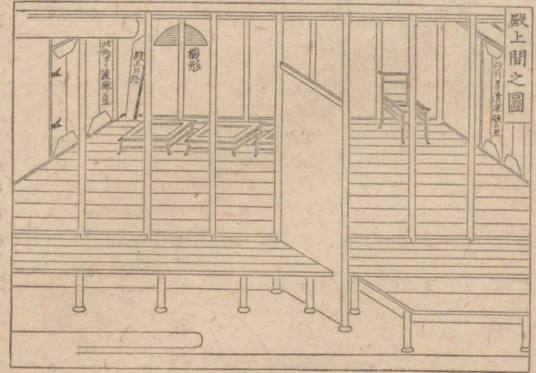
惟方
姓は藤原、平治の亂信頼に與せしが、藤原經宗と謀り、二條天皇を奉じて六波羅に至る。

少納言入道
 名は通憲、出家して信西と號す。鳥羽・崇徳・近衛・後白河の四天皇に仕へて少納言となる。平治の亂に殺さる。
 神樂岡
 今の京都市左京區。

先蹤
 勸修寺内大臣 藤原高藤、昌泰三年(五〇)歿。三條右大臣 高藤の子定方、承久二年(五三)歿。
 英雄 清華に同じ。攝家に次ぐ名門。

時の有識然るべき人どもなり。その内に入らむこと甚だ面目なるべし。さても、先日右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向はれけるは如何に。以ての外然るべからざる舉動かな。近衛大將檢非違使別當は他に殊なる重職なり。その職に居ながら人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤も未だ聞き及ばず、當時も大きに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず」と宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかば」とて赤面せられけり。光頼卿重ねて、こは如何に敕諭なればとて、いかでか存ずる旨を一議申さざるべき。われらが曩祖、勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君すでに十九代、臣また十一代、承り行ふ事はみなこれ徳政なり。一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴つて、讒佞の輩に與せざりしゆゑに、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝ程の事は

切目の宿
 和歌山縣日高郡切目村。



間の上殿

なかりしに、御邊始めて暴惡の臣にかたはられて、累家の佳名を失はむこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せ上るなるが、和泉紀伊伊賀伊勢の家人等待受けて馳せ加はり、大勢にてぞあんなる。信頼卿がかり、大勢にてぞあんなる。平家の大勢押寄せて攻めむには、時刻をや回らすべき。若しまた火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらむだにも朝家の御歎きなるべし。如何にいはんや、君臣ともに自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡の時にあるべし。右衛門督は、御邊に大小事を申し合はするところ聞ゆれ。

主上
二條天皇。
上皇
後白河上皇。

相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙くおはしますやうに思案せらるべし。さて、主上は何處におはしますぞ。「黒戸の御所に。」「上皇は。」「一本御書所に。」「内侍所は。」「温明殿に。」「劍璽は何處に。」「夜のおとゞに。」と左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かうぞ答へられける。また、朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方さまの女房などぞ影るひ候ふらむ。」と申されければ、光頼卿聞きも敢ず、世の中は今かくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し参らせたんなり。末代なれども、さすがに日月はいまだ地に墮ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は、王法を如何に守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、わが朝にはいまだかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろくしげに憚る所もなく口説き給へば、惟方

黒戸の御所
清涼殿の北廊の
一間。

許由

箕山の隠士。堯の天下を譲らんといふを聞き、て、耳の汚なりとて、潁川の水に耳を洗ひたりといふこと、事文類聚に見ゆ。

は人もや聞くらむと、よに妻まじげに立ちたりけり。光頼卿且は悲しくて、われ如何なる宿業に因つてかゝる世に生れ會ひ、憂きことをのみ見聞くらむ。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を見聞かむ輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼卿の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。

一一青葉

尾上柴舟

名は八郎。文學博士。歌人。岡山縣の人。明治九年生。

尾上柴舟

桑の葉のやはらかなるに透きとほる日かげしみぐ
うれしかりけり
こまぐと緑ひたせる水たまり靜に庭は夏めきにけり

窪田空穂

名は通治。早稻田大學教授。歌人。長野縣の人。明治十年生。

窪田空穂

春の雨降るとは見えぬ檜葉ヒノバの葉に雫たまりて靜にこぼる

人にわれものいひ疲れやめし時夜のしづかに蛙なく

きこゆ

石川啄木

名は一。詩人。岩手縣の人。明治四十五年歿。年二十七。

石川啄木

いのちなき砂のかなしさよさらくと握れば指の間より落つ

東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる

秋の空廓寥として影もなしあまりにさびし鳥など飛べ

大いなる水晶の玉をひとつ欲しそれにむかひて物を思はむ

村田春海
三五頁頭註參照。

芳宜園
加藤千蔭の號。

こてふ云々
「月夜よし夜よし
と人に告げやら
ばこてふに似た
り待たずしもあ
らず。」
（讀人知らず、
古今集）
伊豫籬
伊豫國（愛媛縣）
浮名郡の路峯に
産する笹で編ん
だ簾。
夜の錦云々
「富貴不歸故
郷、如被補夜
行、誰知之者、
（史記、項羽本
紀）」

二三 雅文三篇

一 曇る夜の月を見る

村田春海

芳宜園の月のまどるは、年ごとの契なれば、こてふにも似ぬよの
さまなれど、こよひも例の人々まうで來にけり。さるは降りくら
したる雨の名残、霽れゆかむ空も覺えず、ましてさやけき光まちい
でむは、いと心もとなきを、更けゆかばかくのみにあらじを、こ
よひは寢で明してまし。などいひつゝ、伊豫籬むなしうかゞげて、
空のうちまもらるゝも、いとわりなしや。今宵は名におふ園生の
花も、いたづらに夜の錦にて、淺茅がもとの松蟲のみ、やうく聲添
はりゆくも、猶あかぬわざながら、さすがにあはれは添へつべし。

かきくらす雲間の影はうとくとも

月まつ蟲よせめてかたらへ

（琴後集）

加藤千蔭

號は芳宜園。國
學者。江戸の人。
文化五年（西曆一
八四八年）七十五

泊酒舎

清水濱臣の上野
不忍池畔の家。

大比叡

比叡山のこと。
比良の大わだ

琵琶湖のこと。

大庭

紫宸殿の前庭。

二 泊酒舎に蓮を見る

加藤千蔭

大比叡うつされたる上野の岡の麓、比良の大わだなせる池水の
ほとりに、さゝなみや志賀、さゝれ浪もて名をおほせたる屋あり。
白妙の富士のみ雪も消え、あらがねの土さへ裂くといふなるころ、
人皆涼みせむとて、そのやどりに集ひて、高き屋にのぼりて見わた
せば、池の面は紅のゆはたと見ゆるぞ、蓮の花の咲きみちたるにて
はありける。おひたてる葉のひろごりたるは、宮路ゆくうまびと
のきぬがさの如く、浮きたるは、大庭に百の司のわらふだ敷き並べ
たる如く、葉に置ける露は、白玉の五百つ集ひを解きみだしたるに
なむ似たりける。池の水清らに澄みて、あそぶいろくづ思ふ事な
げなり。人々衣の紐を解きさけ、おはしまに寄りゐて、酒汲みかは
すほど、彼の岡の木高かる瑞枝吹きこす風の涼しきに、えならぬ香
のかをり來るもたとしへなしや。彼方の岸より中島まで、長き堤

西の湖
西湖のこと。中
華民國浙江省杭
縣城西に在る。

さにぬり

日の入る國のま
すらをの法

と。印度の佛教のこ

上の品のうてな

極樂往生を、上

品・中品・下品、三

つに分つ。即ち

その上品の蓮

の座をいふ。

によび出づ

もだもあらず

ふゝめる

をつきて、石もて作れる橋かけわたせるは、もろこしの西の湖とか
いふめる處のさまかけるかたに似通ひて、遙に行きかふ人の袖の
にほひさへなつかしく見ゆ。あるじは吾が國ぶりの歌つくり、書
見ることをしも好めるが上に、こと國の書をさへに朝夕の友とせ
りければ、さるかたの友垣にも乏しからず。唐歌好める何がしの
博士は、さにぬりの小舟に唐少女載せてこの花折らせまくおもひ、
日の入る國のますらをの法に心をよするは、これぞこの上の品の
うてなに生れ出でたらむ心地する。などいひあへりけり。人々
心々に歌によび出づれば、もだもあらず。

なべて世のにごりにそまで住む人の

友と見るべき花ぞこの花

かくて上野の岡の入相の鐘、木の間のぎて響きわたれば、盛り
に開けたりし花の、又ふゝめるさまに立ちかへりたるもあはれ深

中島廣足

樞園又は田翁と

號した。國學者

肥後國(熊本縣)

の人。文久四年

(一五五)歿、年七

十三。

無德

かつぐ

かるものから、遠方の梢の鷺すらねぐらもとむるものをとて、人々
あかれ歸りぬ。

三 蚊遣火

中島廣足

晝のほどの暑けさは水の上さへ無德にて、いと耐へ難かりしを、
やうく日影も傾きて、木の間よりそよぎ出づる風のいと涼しき
に、ゆあみななどしてたちいづれば、月の影さへほのめきて、晝の苦し
さもかつぐわすられぬ。やゝ遠くゆくほど、道の傍らなる賤が
伏屋より煙のいとしげくたち上るは、蚊遣ふすぶるにやと思ふに、
大きな火桶に何にかあらむ、青やかなる木の葉をいと多くさし
入れて、こなたかなたにあふぎちらすは、いとあつかはしく、見る目
もいぶせくて、いそぎ歩みすぎて見れば、やうく薄らぎゆくけぶ
りの杉の梢にたなびきたる霞おぼえて、をかしきに、かはほりさへ
三つ二つ飛びかひたる、繪にも晝かまほしき景色になむ。(樞園文集)

伊勢物語

二卷。著者未詳。在原業平の行跡を記した歌物語。在原業平は阿保親王の第五子。在五位。元慶四年(西暦八五六年)五月六日歿。年五十六。

一三東下り

伊勢物語

一

昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方にすむべき國もとめにとて、行きけり。もとより友とする人、一人二人していきけり。道しれる人もなくて、惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といへる。その澤の邊の木の蔭におりゐて、餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見て或人の曰く、「かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心を詠め。」といひければ、詠める。

唐衣きつゝ馴れにしつましあれば

八橋

三河國(愛知縣)碧海郡知立町八橋

燕子花



はるく來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人餉の上に涙落してほとびにけり。



(筆琳光形尾) 圖語物勢伊

行きく、て駿河の國にいたりぬ。宇津の山に至りて、我が入らむとする道は、いと暗う細きに、葛楓はしげり、もの心ほそく、すゝるなるめを見る事と思ふに、修行者あひたり。「かゝる道には、いかで

宇津の山
駿河國(静岡縣)
安倍郡と志太郡
との間に在る。

かいまする。」といふに見れば、みし人なりけり。京にその人の御許にとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも

夢にも人に逢はぬなりけり

富士山を見れば、五月のつごもりに雪いと白う降り。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか

かのこまだらに雪の降るらむ

その山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむ程して、なりは鹽尻のやうになむありける。

なほ行きく、て、武藏の國と下總の國とのなかに、いと大いなる河あり。それを隅田川といふ。その川の邊にむれるて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなと、わびあへるに、渡守、はや舟に乘れ、日も暮れなむ。」といふに、乗りて渡らむとするに、皆人ものわ

鹽尻



都鳥



みや
桓武天皇の皇
女伊登内親王。
長岡
山城國(京都府)
乙訓郡に在る。
平安寛都以前の
古都

びしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鴨の大ききなる、水の上にあそびつゝ、魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人えしらず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥。」といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はむ都鳥

わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

二

昔男ありけり。身はいやしなから、母なむみやなりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しばくえまうでず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるほどに、しはすばかりに、とみの事と

て御文あり。驚きて見れば歌あり。

老いぬればざらぬ別れのありといへば

いよく見まくほしき君かな

となむありける。これを見て、馬にも乗りあへず参るとて、道すがら思ひける。

世の中にさらぬわかれのなくもがな

千代もと祈る人の子のため

(伊勢物語)

北村透谷

名は門太郎。創作家。評論家。詩人。神奈川縣の人。明治二十七年歿、年二十七。

一四 富嶽の詩神を懐ふ

北村透谷

空を望んで駿驅する日陽、虚に循つて警立する候節、天地の運流いつを以て極みとはするならん。

且に平氏あり、夕に源氏あり、飄忽として去り、飄忽として来る。

一潮山を噬んで一世紀没し、一潮退き盡きて他世紀来る。歴史の

載するところ一潮毎に葉敷を減じ、古苔むしつくして英雄の遺魄

日に月に寒し。あゝ、人生の短期なるきのふの紅顔けふの白頭

忙々促々として眼前のことに營々たるもの、悠々綽々として千載

のことを慮るもの、同じくこれ大暮の同寢。霜は香菊を厭はず、風

は幽蘭を容さず、忽ち逝き忽ち消え、邈冥として踪ぬべからざるを

致す。

墳墓何の權かある。宇内を睥睨し、日月を叱咤せし古來の英雄

何すれぞ墳墓の前に弱鬼の如くなる。誰か不朽といふ字を辭書の中に置きて、而して世の俗眼者流をして縦に流用せしめたる。あゝ墳墓汝の冷々たる舌汝の常に餓ゑたる口、何者をか噬まざらん、何物をか吞まざらん。而して墳墓よ、汝もまた遂に空々漠々たり。水流滔々として洋海に趣けど、洋海は遂に溢れて大地を包まざ、冉冉として行暮する人世、遂に新たなるを知らず、また故なるを知らず。

朽ちざるものいづくにかある。死せざるものいづくにかある。われ答を俟ちて躊躇せり。而して答遂に來らず。朽ちざるに近きものいづくにかある。死せざるに近きものいづくにかある。われこの答を聽かんが爲に、過去の半生を逍遙默思に費せり。而して遂にその一部を聽けりと思ふは非か、非ならざるか。

天地のわかれし時ゆ、神寂びて、高く貴き、駿河なる、富士の高嶺

を、天の原、振りさけ見れば、渡る日の影も隠るひ、照る月の光も見えず、白雲も、いゆき憚り、時じくぞ、雪は降りける。語り継ぎ、

いひ継ぎ行かむ、富士の高嶺は。

(山部 赤人)

白雲、黒雲、積雪、潰雪、閃電、猛雷、これ等のものを用役し、これ等のものを使僕し、これ等のものを制御して、而して恆久不變に威靈を保つもの。富嶽よ、それ汝が渡る日の影も隠るひ、照る月の光も見えず、晝は晝の威を示し、夜は夜の威を示す。富嶽よ、汝こそ不朽不死に邇きものか。汝が山上の浮雲よりも早く消え、汝が山腹の電影よりも速に滅する浮世の英雄何の戲ぞ。勇ましや汝の山麓を西に馳する風。快しや汝の山嶺を東に飛ぶ風。流轉の力汝に迫らず、無常の權汝を襲はず。自由汝と共にあり。國家汝と共に樹てり。何をか畏れとせん。遠く望めば美人の如し。近く眺むれば威嚴ある男子なり。ア



靈山縁起 (筆浦九田野)

ルプス山の大歐文學に於ける、我が富嶽の大和民族の文學に於ける、淵源するところ、關聯するところ、豈寡しとせんや。遠く望んで美人の如く、近く眺めて男子の如きは、そも我が文學史の證するところの姿にあらざや。アルプスの崇巖或はこれを缺かん。然れども富嶽の優美何ぞ大いに譲るところあらん。我はこの觀念を以て我が文學を愛す。富嶽を以て女性の山とせば、我が文學も恐らく女性文學なるべし。雪の衣を被ぎ、白雲の頭巾を冠りたる恆久の佳人、我はその玉容を楽しむ。

人麿

姓は柿本。持統。文武兩天皇に仕へた歌人。歿年未詳。

赤人

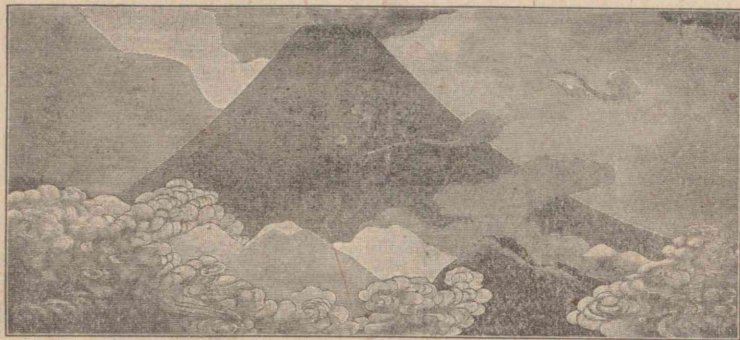
姓は山部。歌人。聖武天皇に仕へた人。人麿と並び稱せられる。歿年未詳。

西行

俗名は佐藤義清。歌人。後鳥羽上皇の北面の武士であつたが、後出家して西行と號した。建久元年(八五〇)歿。年七十三。

芭蕉

七頁頭註参照。



靈山縁起 (筆浦九田野)

盡きず朽ちざる詩神、風に乗り、雲に御して東西を飄遊し給へり。富嶽駿河の國に崛起せしといふ朝、彼は幾億萬里の天涯よりその山嶺に急げり。而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐り棲みて、遂にまた去らず。これより風流の道大いに開け、人麿赤人より降つて、西行芭蕉の徒、この詩神と逍遙せんが爲に、富嶽の周邊を往返して、形なく像なき記念碑を空中に構設し始めたり。詩神去らず、この國なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味はひあり。(透谷全集)

尾崎紅葉

名は徳太郎。小説家。東京市の人。明治三十六年歿。年三十七。此處 新潟縣直江津町

香嶽樓

新潟縣中頸城郡一本木新田の赤倉温泉場の旅館。筆者は二日間そこに泊つて、今朝立つて来たのである。わが眉太し云々 涼風のわが眉太し佐渡ヶ島 (尾崎紅葉) 美人を天の一方に望む 蘇東坡の赤壁の賦の句 温泉水滑云々 白樂天の長恨歌の句

一五 佐渡紀行

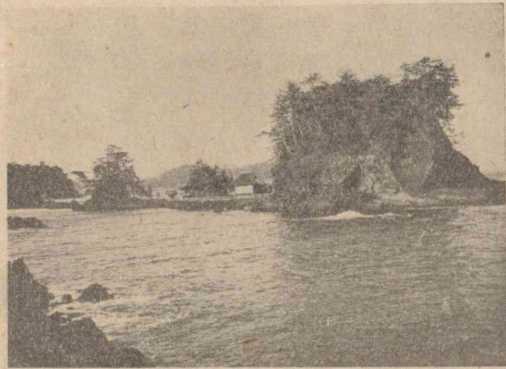
尾崎紅葉

九時三十分に此處を發車して、忽ち眼明らかなりと驚けば、渺々たる日本海は折しも波に一船を着けず、雲に一鳥を帯びずして、千萬頃の虚しく闊きに、たゞ池の如き潮の浩蕩として遊ぶのであつた。と見るに、琉璃の煙るやうに物ありて、ほのかに顯るゝを、早くも「佐渡、々々」と案内する聲がした。まことに香嶽樓の縁端に伸び上つて、「わが眉太し」とこの美人を天の一方に望んだ佐渡ヶ島は、今日を遮るものもあらぬ三十海里の波上に、「温泉水滑洗凝脂」とやうに浮び出たのである。

美なるかな、この島の風情。凡そ眺めてかくも懐しく、又譬へん方なく心動かさるゝ遠景色は、これを他に求めて己はありとも覺えぬ。直江津の古い「鹽たれ唄」とかいふのに、

佐渡へくと草木も靡く

佐渡は居よいか住みよいか



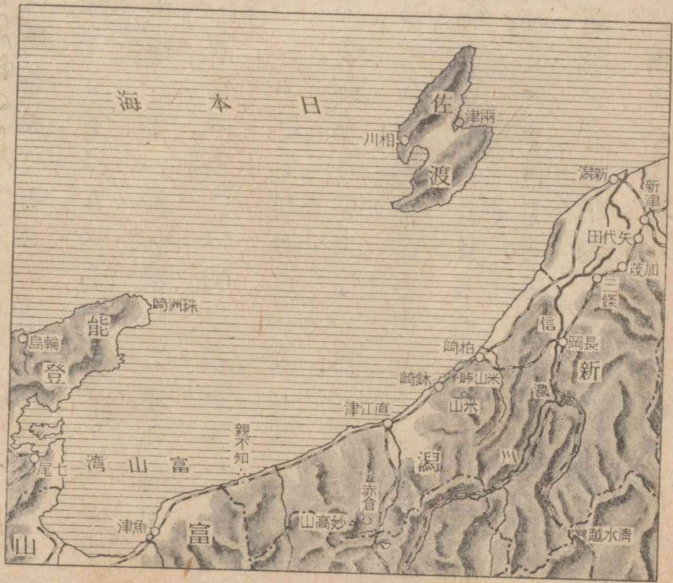
佐渡ヶ島

とあるのを見ても、この景に對して心を動かさざる者はないと知れる。殊に「居よいか住みよいか」と疑つた處に言はれぬ妙があるので、この唄の精神もたゞその九字に存すれば、又この景に人の恍惚たるのも、頗るその九字の感に堪へぬのである。又かの「來いとゆたとて行かりよか」の如きは、苟も日本語を解する者にして知らざるはなきまでに轟いてゐる。其處が古の配處であつたとも知らず、今も小判になる物が出ると知らぬ輩でも、波の上の行かれぬ處といふことは皆心得てゐる。

來いと云々 俚語の一節で、「來いとゆたとて行かりよか佐渡へ、佐渡は四十里波の上」と續くのである。

それほどの口吟を思はずに誰一人こゝが過ぎらるゝであらう。

遙に佐渡が見ゆる、四十九里と直ちに胸に浮ぶ、それにしては近いやうだといふ疑ひが又起るのである。能登の輪島から四十九里といふ説があつて、とにかく越後の唄ではないに極つてゐる。佐渡の相川の人々の談に、極々快晴の日、所謂日本晴には、能登の珠洲崎が雲煙縹渺として見ると謂へば見えるくらゐに見える。その人は一年の中に唯一度見たといふ。そこで、



輪島
石川縣鳳至郡に在る町の名。

相川
佐渡に在る町の名。
珠洲崎
石川縣珠洲郡に屬し、能登半島の最北端をなす岬。

岸田吟香翁
〔東京日日新聞〕の創始者、明治三十八年歿、年七十三。

鉢崎
新潟縣中頸城郡米山村に屬する字。この名の一驛がある。
柏崎
同縣刈羽郡に屬する町の名で、また鐵道の一驛である。
薩埵峠
靜岡縣庵原郡に屬する。

「來いとゆたとて行かりよか」の首を搔いて遠人を憶ふ惆悵無限の意が殊に深い。この「來いとゆたとて」に就いて思ひ出したのは過ぐる年、富小路侍従の行くを送つて岸田吟香翁の歌がある、なかなか面白い。

大君のみことかしこみ來いとゆたとて行かりよかと
いふ佐渡へ行く君

己も亦一句なかるべけんやと、
來いといふ人あれ島は涼しげなり

抑、この海の雄渾と併せてこの島の秀麗を見るのは、北越鐵道線雙快の一で、他は更に進んで鉢崎から柏崎に抵るまで米山峠の真下を磯傳ひに疾驅しつゝ、八門のトンネルを出入するのである。その趣は稍、東海道線の薩埵峠を過ぐるに髣髴たるのであるが、これは皮相の似たるばかりで、彼に在つては全くこの氣魄を虧く。

突兀

道は荒波の磯邊であるから、一面巖石突兀として、或は潮に臥し、或は草に蹲まり、或は山に逆つて峙ち、或は水に臨んで佇るといふ有様。さてその大いなるものに在つては、百歩にして崖と壅がり二百歩にして岩鼻と突き出るのを、總べてトンネルに貫いて、佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺し、道に當る者あれば必ず突いて進むのである。

碓氷
群馬縣碓氷郡と
長野縣北佐久郡
との境に在る
峠。海拔約一〇〇〇米。

トンネル續きの線路は、碓氷であれ、箱根であれ、皆理の同じからぬはないが、別して此處にその想があるのは、長汀逶迤として六枚屏風の將に疊まんずる如き曲折を盡すが故に、甲のトンネルを出づれば直に乙のトンネルの全景が見える、乙を過ぐれば丙、丙が去れば丁と、彼等は争つて五月蝸なすのが一々目に入る。譬へば己大剛の者にして、群る敵を物の數ともせず、當るを幸ひ、一太刀づつ片端から撫斬にして通るも斯くやと覺ゆるやうにて、而も處は牙

長岡

新潟縣の中央部に在る市の名。
三條・加茂
共に同縣南蒲原郡に屬する町の名。
矢代田
同縣中蒲原郡小須戸町の一字。

手に方りて日本海、逃るゝ路も荒磯の浪鞆と寄せては返す閑の聲、馬手には峻嶺峨々として、當國無雙の名も高き米山峠は聳えたり、と思へば、殆ど快極つて肉躍るのであつた。此處を過ぐれば、汽車を嫌ふ者も汽車に在るのを忘れ、喜ばしからぬトンネルも時に取つての興となつて、なか／＼神經などを衰弱させてゐる段ではなかつた。

柏崎を踰ゆれば線路は次第に海に遠ざかつて、長岡を過ぎ、三條に入らば、この邊からかけて、加茂矢代田の水害は甚しきもので、見ゆる限りは村もなく、小屋もなく、平一面の漠々たる青田である。その七分を領して氾濫する水は縦横に川を畫いて流れ、水嵩の厚き處は湖の狀をなして、漾々波を弄んでゐる。水漬になつて稻の葉末の小指ほども出てゐる處を見れば、水さへ退けば舊のやうにぴんとなるのであらうと、たゞ水の勢を見て、害の恐るべきを知

らぬのであつたが、その水の退いた跡を過ぎて見ると、慄然とした。苗は悉く根を抜いてぶつ倒れたのを、又この上から踏んづけ散らしたやうに、百方狼藉を極めた體たらくは、とても米の生る木と見る影はない。

水害の跡弔ふ田唄作らせよ

まどろむかと思へば、「のつたり」と呼び起されて、こゝで下りると慌てて停車場を出れば、三時十分。さて此處に八千八川の水を取つて一條の流れに打成すと聞ゆる信濃川を帯びて、日本五港のなる繁華と、北陸七箇國の大都會たる、殷富とを左右にせる新潟市は、始めて己の眼に映ずるのであつた。が頗る不足を感じた。今己は車を驅つてその繁華の都會に入らんとするに際して、必ず爾あるべき意氣の盛んなるものが絶えてなくして、心の底には冷やかなものが觸れてゐたのである。

(紅葉全集)

のつたり
沼垂の訛。今は新潟市の一部。

日本五港

明治維新の初に開港場として開放した五つの港。横濱・神戸・長崎・新潟・函館。

北陸七箇國

若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡。

増鏡

三卷、二十篇。著者未詳。後鳥羽天皇の即位から醍醐天皇の御代まで十五代の約百五十年間の歴史物語。

富士川

源を山梨縣に發し、静岡縣駿河灣に注ぐ。長さ一六一軒。

天龍

源を長野縣諏訪湖に發し、静岡縣を貫流してある。長さ約二一六軒。

君

後鳥羽天皇。

六月二十日
承久三年(一六)

一六 新島守

増

鏡

いつの年よりも五月雨晴れ間なくて、富士川天龍などえもいはずみなざり騒ぎで、いかなる龍馬もうち渡し難ければ、攻め上る武者どもも怪しく惱めり。かゝれども終に都に近づく由聞ゆれば、君の御武者も出でたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分ち遣す。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山に逃げ籠り、遠き世界に落ち下り、すべて安げなく騒ぎ満ちたり。いかゞあらむと君も御心亂れて思し惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことのきはになりぬれば、いと心あわたしく、色を失ひたるさまども、たのもしげなし。六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて、終に味方のいくさ破れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ

本院
後鳥羽天皇。

鳥羽殿

城南の離宮ともいふ。京都市伏見區下鳥羽に舊蹟が在る。

ものにもがなや「とりかへすものにもがなや世の中をありしなごらのわが身と思はむ。」

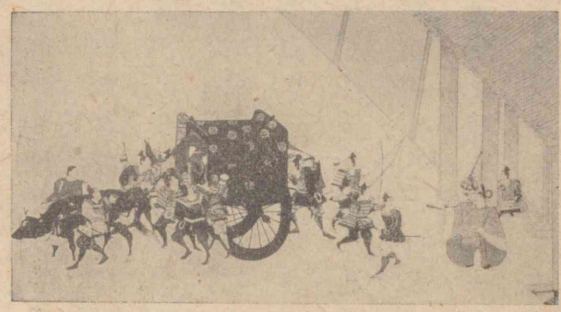
(源氏物語、柏木)

信實

藤原信實。畫家として知られてゐる。文永二年(一一九三)歿。年八十九。

七條院

後鳥羽天皇の御生母。



網代車

方なくあきれて、上下たゞものにぞ當り惑ふ。

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍謀らひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院宮々、所々に思し惑ふことさらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車の怪しげなるにて、七月六日入らせ給ふ。

今日を限りの御ありき、あさましう哀れなり。「ものにもがなや」と思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年よそぢに一つ二つや餘らせ給ふらむ、まだいとほしかるべき御程なり。

信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はむ

新院
順徳上皇。

みかど
仲恭天皇。

唐土にぞ云々

秦の第三世子嬰のこと。始皇の孫。四十六日、沛公に降り秦は亡んだ。

中院
土御門上皇。

幡多
高知縣の西南、幡多郡に在る。

となり。かくて同じ十三日に御船に奉りて、遙なる波路を凌ぎおはします御心ち、この世の同じ御身とも思されず、いみじういかなりける代々の報にかと恨めしく、新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや七月九日みかどをもおろし奉りき。この四月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へるためしも、これや初なるらむ。「唐土にぞ四十五日とかや位におはするためしありける。」とぞ、唐の書讀みし人のいひし心ちする。それもかやうの亂やありけむ。さて上達部殿上人、それより下はた残りなくこの事に觸れにし類は、重く軽く罪に當るさま、いみじげなり。

中院は初よりしろしめさぬことなれば、あづまにも咎め申さねど、父の院遙に遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にてあらむこと、いと恐れありと思されて、御心もてその年閏十月十日、土佐國の幡多

若宮
 邦仁親王、後に
 第八十八代後嵯
 峨天皇
 承明門院
 土御門天皇の御
 母在子
 むすめ
 源通子

憂世には云々
 續古今集に、「題
 知らず、土御門
 院御製」とある。

後には
 同年閏十月
 阿波國
 徳島縣

といふ所に渡らせ給ひぬ。去年の二月ばかりにや、若宮いでき給へり、承明門院の御せうとに、通宗の宰相中將とて、若くて失せ給ひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家にとゞめ奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下薦一人、召次などばかりぞ御供つかうまつりける。いと怪しき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風吹きあれ、吹雪して、來し方行く先も見えず、いと堪へ難きに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

憂世にはかゝれとてこそうまれけめ
 ことわり知らぬわがなみだかな

「せめて近きほどに。」とあづまより奏したりければ、後には阿波國に遷らせ給ひにき。
 さてこのたび世の有様、げにいとうたて口惜しきわざなり。

父の王云々
 「劫初以來、有諸
 惡王、貪國位、
 故殺其父、一萬
 八千人」
 (觀無量壽經)
 將門
 平將門、檢非違
 使たらんとし藤
 得ず。反して藤
 原秀郷・平貞盛
 に滅さる。朱雀
 天皇の天慶三年
 (八〇〇)歿。
 純友
 藤原純友。將門
 と相應じて反
 斬らる。朱雀天
 皇の天慶三年(八〇〇)歿。
 義親
 源義親。源義家
 の第二子。堀河
 天皇の康和三年
 (一一〇二)鎮西に横
 行して命をきか
 ず。後誅せらる。
 時に鳥羽天皇の
 心。
 崇徳院
 崇徳天皇。

あるは、父の王を失ふためしだに、一萬八千人までありけり。」とこそ佛も説き給ひためれ。まして世下りて後、唐土にも日本にも、國を争ひて戦をなすこと數へつくすべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけむ。若しはすぢ異なる大臣、さらでもおほやけともなるべききざみの、少しのたがひめに世に隔りて、その恨の末などより事起るなりけり。今のやうにむげの民と争ひて君の亡び給へるためし、この國にはいと數多も聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に崇徳院の世を亂り給ひしだに、故院の御位にてうち勝ち給ひしかば、天照大御神も御裳濯川の同じ流れと申しながら、なほ時の御門を守り給はすることは強きなめり。」とぞ、古き人々も聞えし。また信賴の衛門督おほけなく、二條院を脅し奉りしも、終に空しき屍をぞ道のほとりに棄てられける。かゝれば

故院 後白河法皇。

信賴

藤原忠隆の第三子源義朝と結んで平治の亂を起し後白河上皇・二條天皇を幽し奉る。後遂に平清盛に破られて六條河原に斬らる。時に平治元年(一一七二年)二十九

二條院

第七十八代二條天皇

六つにて

後鳥羽天皇

津の國云々

「津の國のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ蘆の八重ぶき」(和泉式部後拾遺集)

舊りにしことを思ふにもなほさりともしいかでか三皇今上數多在
します王城の徒らに亡ぶるやうやはあらむとたのもしくこそ覺
えしにかくいとあやなきわざの出で來ぬるはこの世一つのこと
にもあらざらめども迷ひの愚なるまへにはなほいと怪しかりし
六つにて位に即かせ給ひて、十三年おはしましき。 おり給ひて
後も土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じことなりしか
ば、すべて三十六年がほど、この國のあるじとして萬機の政を御心
一つにをさめ、百の官を従へ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡
かすよりもまされる御有様にて、遠きを憐び近きを撫で給ふ御惠
み、雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやのひまなき政を聞召すに
も、難波の葦の亂れざらむことを思しき。 藐姑射の山の峯の松も
やうく枝を連ねて千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ、幾春
を経て空行く月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかり

柴の庵云々

「いづくにもすま
れずばたぐすま
であらむ柴の庵
のしばしなる世
に。」

(西行法師、新古今集)

水無瀬殿

後鳥羽天皇のお
造りになつた御
殿。攝津國(大阪
府)三島郡島本
村。

ける世をありく／＼てよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立
別れ、おのがちり／＼にさすらへ、磯のとまやに軒を並べて、自らこ
と問ふものとは、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わ
が故郷のしるべにかとばかり、ながめ過させ給ふ御すまひどもは、
それまでと月日を限りたらむだに、あす知らぬ世のうしろめたさ
に、いと心細かるべし。 まいていつをはてとか廻りあふべき限り
だになく、雲の浪、煙の浪の幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべ
き御さまども、口惜しといふもおろかなり。

「このおはします所は、人離れ、里遠き島の中なり。 海面よりは少
し引入りて、山蔭に片そへて、大きやかなる巖の時てるをたよりに
て、松の柱に葦ふける廊など、けしきばかりことそぎたり。 まこと
に柴の庵のたゞ暫しとかりそめに見えたる御宿りなれど、さる方
になまめかしく故づきてしなさせ給へり。 水無瀬殿思し出づる

二千里の外云々
 「三夜中新月、
 色。二千里外故
 人心。」
 (白樂天の詩
 句、和漢朗詠
 集)

も、夢のやうになむ。遙々と見やらるゝ海の眺望、二千里の外も残りなき心ちする、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹きくるを聞召して、

われこそは新島守よおきの海の

あらし浪かぜこゝろして吹け

同じ世にまたすみの江の月や見む

けふこそよそにおきの島守

(新島守)

久松潛一

文學博士。國文學者。東京帝國大學教授。愛知縣の人。明治二十七年生。

一七 文學の新生

久松 潛 一

日本文學の主潮を流るゝ精神に「まこと」と物のあはれ」と幽玄」とがある。この三つの精神は、日本文學を構成する本質であり、随つてそれを透視し得る三つの標目である。

「まこと」は眞實をあるがまゝに表現するもので、我が上古文學を貫流する精神である。そこには強い國家的精神と個人的精神とが現れて居る。その國家的精神があるがまゝに表現されたのが古事記である。古事記には想像もあり超現實的なことも多いのであるが、それは古代人の眞實な精神の反映であつて、子供の心に描くお伽噺の世界が空想的であり、超現實的であつても、子供にとつては眞實の世界であると同様である。又その個人的精神は萬葉集を中心として流れて居る。素より萬葉集には國家的な意識

まこと

古事記

三卷。太安麿の撰。元明天皇和銅五年(三三〇)を奉じ、神田阿禮の口誦に本づいて編述したものと傳へられたる。我が國最古の史書。

萬葉集

二十卷。撰定年代及び撰者未詳。我が國最初の歌集。

人麿の挽歌

萬葉集卷二に
高市皇子尊城
上殯宮之時、作
歌一首並短歌
「かけまくもゆゑ
しきかも言はま
くもあやに畏き
明日香の眞神の
原に久堅の天津
御門をかしこく
も定め給ひて云
云。」とある。

が見えないといふのではない。例へば人麿の挽歌などは國家の建設を説き、神の世界を歌つて居る。けれどもその中心はやはり皇子の薨去を痛む個人的、主觀的の感情である。唯その表現は、我が上古文學に通有な素樸性を帯びて居る。

かうした精神は、後世に於ても、文化が爛熟した時常に復古的精神として現れて來るのである。この復古的精神は、古代人の眞實性と素樸性とに復ることがその思潮の中心である。現實生活のはかなさ、醜さに悩む時に、この現實から離れて素樸性と眞實性を求める、まことの精神が常に力強い雄々しい増荒男振の精神となつて、國文學の中に持續的に流れて居るのである。

「物のあはれ」は心と形との調和の中に見出される情趣の世界である。それは上古文學を流れて居るやうな素樸な感情ではなく、それをあくまでも洗煉した境地である。この「物のあはれ」は平安

物のあはれ

當時の物語類

落窪物語・宇津保物語・源氏物語・狹衣物語の類
軍記物語
保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記・太平記の類

幽玄

古今集の眞名序
紀貫之の和文の序を紀淑望が漢譯したものである。

朝時代の文學のすべての形態の上に見出されるもので、強烈な感動を沈靜にし、情趣化するものである。この精神は當時の物語類に最もよく現れて居る。軍記物語には、英雄的敘事的精神とこの「物のあはれ」を主潮とする、抒情的精神とが互にもつれあつて、そこに花やかな勇壯な悲壯美を形づくつて居る。また徒然草に於ても、その思索を體驗にまで深める哲人的精神の中に、この「物のあはれ」が流れて居る。この「物のあはれ」が流れて居ることによつて、近古文學は薄暗い中にほのかな明るさを有し、寂しさの中に一脈の華やかさを保つて居るのである。

「幽玄」とは、言葉としては古今集の眞名序にも、既に「或事關神異、或興入幽玄」とあるが、その本來の意味からいふと、「物のあはれ」とほぼ同様な纖細なる情趣である。それが平安朝末期の現實のはかなき轉變から人生の無常を觀ずるに至つて、「幽玄」の心持も物寂し

俊成
姓は藤原。歌人。
千載集の撰者。
元久元年(一六四)
歿、年九十一。

い境地を主とするやうになつて來た。俊成がその最も得意な歌として、

夕されば野への秋風身にしみて
鶉ウツなくなりふかくさの里

を擧げたといふことによつても、幽玄の中心となるものが、秋の夕暮の寂しさのやうな境地であつたことが察せられる。西行が自然の中に放浪する事によつて見出した静寂の境地も、亦これと同様である。この「幽玄」は俊成の所謂、遠白い即ち壯大といふ感情と、心が細かい即ち繊細といふ情趣とを結びつけて、これを統一した中に見出される精神である。

平安朝時代には、何事も個人を中心としたが、鎌倉時代になると、個人の弱さ、はかなさを觀じた結果、傳統の中に自己の生命を見出さうとするやうになつた。即ち文學を個性的にそのまゝ表現し

ないで、これを傳統の型の中に入れて、それにいふしをかけた上で表現するやうになつたのである。個性を否定して、その小さい我の否定された中に現れてくる大きな自我から、「幽玄」の精神は現れて來るのである。



文人畫 (夏珪筆)

あの小さい茶室の中に於て、その中から型に捕はれない自由な境地を見出

して來る所に、茶道の精神はある。又、庭園の一樹一石にも深山を象徴し、一本の線の中にも限らない餘情を含ませ、氣韻を生動せしめる當時の文人畫にしても、一見型に嵌つた粗笨なものやうに見えるが、その中には自然や人生が象徴的に表現されて居るのである。

世阿彌
室町時代の能役
者。父親阿彌と
共に、謡曲の作
者であるといは
れてゐる。

この「幽玄」はまた能樂に於ても見られる。それは一つの型に入
れて、その中に普遍的な人間性を表さうとして居るのである。世
阿彌は「物まね」「花」「幽玄」の三事を説いて居る。物まねは寫實であ
る。花は變化であつて、一つから他のものに移り變る事によつて
生ずる珍しさである。散つて行く花から新しい花を創造してゆ
く所に、花の眞の生命がある。そこに花そのものの永遠性が見出
される。「幽玄」はこの變化を超越した花である。それは不變の花
であり、美の絶對的境地である。これを「物まね」と「花」との境地の間
から見出して來るのである。この人生の永遠性を一つの型の中
から見出して來るのが能樂の精神である。而してこれは又近古
文學を通じて流れて居る精神であつて、表面には現れてゐない美
しさであるが、しかもその中に限りない大きな深い美しさが満た
されて居るのである。

寂
び

この「幽玄」の精神は、近世に於て芭蕉の閑寂の精神ともなつて居
る。芭蕉は自然を深く凝視して、その本質を「寂び」であると思つたの
である。これは自然をあるが儘に見たといふよりは、あるが儘の
自然に奥深く入ることによつて、その本質を見極めたのである。
「まこと」の精神にあらゆるものから脱却した新生の叫びがあると
すれば、「寂び」はそのあらゆるものから解放された中に見出された
ものの本質である。而して芭蕉が「不易」と「流行」との間を透して、こ
の「寂び」の精神を見出して來たことは、「物まね」と「花」との間から「幽玄」
を見出した世阿彌と同一の立場にあつたのである。既に西行も
自然の中からのこの靜寂を擲んで來たのであるが、西行にはこの靜
寂の中に入りきれなかつた所に「焦燥」があつた。しかも芭蕉に至
つては、この境地に深く徹して、「寂び」をその生活の上に見出して來
て居る。「蓑一笠」の旅の中に、大きな生活を見出した芭蕉は、自然

の本質が「寂び」であると見極めたのみならず、人間生活の本質もこの「寂び」にあると考へたのである。「高く心をさとりて俗にかへるべし。」といふのは、生活を寂び化し、幽玄化することであると解される。かくの如くして自然と人生との窮極である「寂び」や「幽玄」は、又、藝術の窮極でもあつたのである。「匂ひ」と「寂び」と「細み」としをりとを重んじた彼の俳諧は、「寂び」の藝術であり、「幽玄」の藝術であつた。自然と人生と藝術とを貫いて流れる「寂び」や「幽玄」の精神が芭蕉の精神であつたのである。即ち俊成・西行等によつて見出されて、近古文學の基調をなした「幽玄」の精神は、近世に流れて芭蕉に及んだのである。これを「まこと」と「物のあはれ」とに比較すると、「まこと」はあるが儘のものに理念を見出した境地であり、あるが儘のものの中から、あらうとするものを見出して表現したのが「物のあはれ」であり、更に自然と人生と藝術とを結びつけて、それにいふしをかけ

て、統一せしめ結晶せしめた白光の如き境地が「幽玄」である。

かくの如く見る時は、「まこと」と「物のあはれ」と「幽玄」とは、一見異つた理念のやうではあるが、しかもそれは本質的な相違ではなく展開の過程であることが知られる。「まこと」が童心と素樸との藝術を生み出し、「物のあはれ」が心と形との融合調和した藝術を生み出し、更に「幽玄」が自然や人生を型の中に入れて、その間から結晶した白光として象徴的な藝術を生み出したのである。而して此等の展開流動する精神を統一するものが、日本文學の本質である。この本質的精神が原始時代から絶えず流れて来て、「まこと」から「物のあはれ」となり、「幽玄」となり、而してその窮極した境地が陳套に陥つて来る時、また「まこと」の精神が甦つて新生の氣運を醸し、更にそれが持続的に展開するのである。

明治以後の文學は歐米の新しい文學思潮と種々の科學との影

響によつて、上述の三精神も大いに變化して、その形が變つて來たが、これを見出すことは決して困難ではない。元よりありしまゝの「まこと」や物のあはれや「幽玄」ではなく、新しい意義と形態とを與へられたものであるが、しかも日本文學を流れる傳統的精神はそこに見出されるのである。この傳統的精神を日本文學の中から探ることによつて、國民の生命の糧であり力である國民文化の本質ともいふべきものが理會されるのである。

(上代日本文學の研究に據る)

松尾芭蕉

七頁頭註参照。

風羅坊

芭蕉の別號である。落款に、風羅・風尾の二印を使用した。

西行

八五頁頭註参照。

宗祇

姓は飯尾。室町末期の連歌師。文龜二年(二二六)歿、年八十二。

雪舟

本名は小田等楊。備中國(岡山縣)の人。室町時代の淡墨の山水畫家。永正三年(二二六)歿、年八十七。

利休

五頁頭註参照。

一八 笈の小文

松尾芭蕉

百骸九竅の中に物有り、かりに名付けて風羅坊といふ。誠にうすもののかぜに破れやすからむ事をいふにやあらむ。かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごととなす。或時は倦きて放擲せむ事をおもひ、ある時はすゝんで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたゝかうて、是が爲に身安からず。しばらく身を立てむことをねがへども、これが爲にさへられ、暫く學んで愚を嚙らむ事をおもへども、是が爲に破られ、つひに無能無藝にして只此の一筋に繋がる。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其の貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。かたち花

長太郎

井手由之の通稱磐城國(福島縣)小名濱の人。

其角亭

其角の寓居。當時江戸、伊勢町に在ったといふ。

露沾公

岩代國(福島縣)平藩の人。姓は内藤。若く嗣子の責任を過れ俳諧に遊び遊園堂と號した。三月の糧。適三百里者宿。春糧。適千里者三月聚糧。(莊子)

にあらざる時は夷狄に齊し。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。神無月の初空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、旅人と我が名よばれむ初しぐれ
また山茶花を宿々にして
磐城の住、長太郎と云ふもの、此の脇を付けて其角亭において關送りせむともてなす。

時は冬よし野をこめむ旅のつと

此の句は露沾公より下し給はらせ侍りけるを、はなむけの初として舊友親疎門人等あるは詩歌文章をもて訪ひ、或は草鞋の料を包みて志を見はす。かの三月の糧を集むるに力を入れず。紙衣。綿子などいふもの、帽子。したう。やうのもの、心々に送りつどひて、霜雪の寒苦をいとふに心なし。あるは小船をうかべ、別墅にまうけ

紀氏

紀貫之。土佐日記の作者。

長明

鴨長明。方丈記の作者。

阿佛の尼

十六夜日記の作者。

黃奇・蘇新

黃山谷と蘇東坡。共に支那の詩人。

阿波の庄

伊賀國(三重縣)の上野から伊勢國(三重縣)の津に通ずる街道に在る。伊勢の國境長尾峠の麓である。俊乘上人。俊乘坊重源。源空に師事して入宋し、歸朝後、東大寺を再建した高僧である。

し、草庵に酒肴携へ來りて行方を祝し、名残ををしみなどするこそ、故ある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覺えられけれ。抑道の日記といふものは紀氏長明阿佛の尼の文をふるひ、情を盡してより餘は皆佛似かよひて、其の糟粕を改むる事あたはず、まして淺智短才の筆に及ぶべくもあらず。其の日は雨降り晝より晴れて、そこに松有り、かしこに何と云ふ川流れたりなどいふ事、たれだれもいふべく覺え侍れども、黃奇蘇新のたぐひにあらずば云ふ事なかれ。されども其の所々の風景心に残り、山館野亭の苦しき愁ひも、且は嘶の種となり、風雲の便りと思ひなして、忘れぬ所、後や先やと書き集め侍るぞ、猶醉へる者の妄語に齊しく、いぬる人の謔言するたぐひに見なして、人又亡聽せよ。
伊賀の國阿波の庄といふ所に俊乘上人の舊跡有り。護峰山新犬佛寺とかや云ふ名ばかりは、千歳の形見となりて、伽藍は破れて

礎を残し、坊舎は絶えて田畑と名の變り、丈六の尊像は苔の緑に埋もれて、御ぐしのみ現前とをがまれさせ給ふに、上人の御影はいまだ全くおはしまし侍るぞ、其の代の名残うたがふ所なく、泪こぼるる許りなり。石の蓮臺獅子の座などは蓬葎の上に堆く、雙林の枯れたる跡もまのあたりにこそ覺えられけれ。

丈六にかげろふ高し石の上

故主蟬吟公の庭にて、

さまざまの事おもひ出す櫻哉

伊勢山田

何の木の花とはしらず匂ひ哉

彌生半ば過ぐる程、そゞろにうき立つ心の花の我を導く枝折となりて、よし野の花におもひ立たむとするに、かのいらこ崎にてちぎり置きし人の伊勢にて出でむかひ、ともに旅寐のあはれをも見

蟬吟公
伊賀國(三重縣)
上野城代藤堂良
精公の子良忠の
俳號。芭蕉の若
い頃の主君であ
る。

いらこ崎
伊良子崎。三河
國(愛知縣)に在
る。

萬菊丸
芭蕉の門人。杜
國。名古屋の人。

且は我が爲に童子となりて、道の便りにもならむと自ら萬菊丸と名をいふ。まことにわらはべらしき名のさまいと興あり。いでや門出のたはぶれ事せむと笠のうちに落書す。

乾坤無往同行二人

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠

よし野にて我も見せうぞ檜木笠

萬菊丸

旅の具多きは道ざはりなりと物皆拂ひ捨てたれども、夜の料にと紙子壹つ、合羽やうの物、硯筆、かみ、藥等、書笥など物に包んで、後ろに背負ひたれば、いとゞすね弱く力なき身の後さまにひかふるやうにて、道猶すゝまず、たゞ物うき事のみ多し。

草臥れて宿かる比や藤の花

初瀬

春の夜や籠人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えたり花の雨

萬菊丸

葛城山

猶みたし花に明け行く神の顔

三輪 多武峯 臍峠

雲雀より空にやすらふ峠哉

西河

ほろくくと山吹ちるか瀧の音

西河 奈良縣吉野郡川上村。西河の瀧がある。

踵はやぶれて西行にひとしく天龍の渡しをおもひ馬をかる時はいきまきし聖の事心にうかぶ。山野海濱の美景に造化の巧を見あるは無依の道者の跡をしたひ風情の人の實をうかふ。猶栖をさりて器物のねがひなし。空手なれば途中の愁ひもなし。寛歩駕にかへ、晚食肉よりも甘し。とまるべき道にかぎりなく立つべき朝に時なし。只一日のねがひ二つのみ。こよひよき宿か

らむ。草鞋のわが足に宜しきを求めむとばかりは、いさゝかのおもひなり。時々氣を轉じ、日々に情をあらたむ。もしわづかに風雅ある人に出合ひたる悦びかぎりなし。日比は古めかしく、かたくななりと惡み捨てたる程の人も、邊土の道づれにかたりあひ、はにふむぐらのうちにて見出したるなど、瓦石のうちには玉を拾ひ、泥中に金を得たる心地して、物にも書き付け、人にもかたらむとおもふぞ又是旅のひとつなりかし。

衣 更

一つぬいで後ろに負ひぬ衣がへ

吉野出て布子賣りたし衣がへ

萬菊丸

灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣で侍るに、鹿の子を産むを見て此の日に生ひてをかしければ、

灌佛の日に生れあふ鹿の子哉

植生
たふらぬや

10月8日

招提寺

一に唐招提寺と
もいふ。大和國
(奈良縣)生駒郡
都跡村に在る。
鑑眞和尚
支那揚州江陽縣
の人。天平勝寶
五年(四三三)十二
月、薩摩に上陸
し、太宰府を經
て奈良に入つ
た。

招提寺鑑眞和尚來朝の時、船中七十餘度の難をしのぎたまひ、御

目のうち鹽風吹き入りて、終に御目盲ひさせ給ふ尊像を拜して、

若葉して御めの雫ぬぐはばや

須磨

月はあれど留守のやうなり須磨の夏

卯月中比の空も臙に残りて、はかなきみじか夜の月もいと艶
なるに、山は若葉にくるみかゝりて、時鳥鳴き出づべきしのゝめも、
海のかたよりしらみそめたるに、上野とおぼしき所は麥の穂浪あ
からみあひて、漁人の軒ちかき芥子の花のたえぐに見渡さる。

海士の顔先づ見らるゝやけしの花

東須磨西須磨濱須磨と三所にわかれて、あながちに何わざする
とも見えず。藻鹽たれつゝなど歌にもきこえ侍るも、いまはかゝ
るわざするなども見えず。きすごといふ魚を網して、眞砂のうへ

藻鹽たれつゝ
「わくらははにとふ
人あらば須磨の
浦に藻鹽たれつ
よつわぶ」と答へ
る。
(古今集、在原
行平)

鐵拐が峯

攝津國(兵庫縣)
武庫郡一の谷の
背後に聳える
山。

にほしちらしけるを、からすの飛び來りてつかみ去る。是をにく
みて弓をもて威すぞ海士のわざとも見えず。若し古戦場の名残
をとめてかゝる事をなすにやといと罪ふかく、猶昔のこひし
きまゝに、鐵拐が峯にのぼらむとする、導きする子のくるしがりて、
とかくいひまぎらはすをさまゝにすかして、麓の茶店に物くら
はすべきなど云ひて、わりなき體に見えたり。かれは十六と云ひ
けむ里の童子よりは四つばかりも弟なるべきを數百丈の先達と
して、羊腸險岨の岩根をはひのぼれば、すべり落ちぬべき事あまた
たびなりけるを、つゝじ根ざさにとりつき、息をきらし、汗をひたし
て、漸く雲門に入るこそ心もとなき導師のちからなりけらし。

須磨のあまの矢先に鳴くか郭公

ほとゝぎす消え行く方や島一つ

須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

秋をむねとする
「又なくあはれ
なるものはかゝ
る所の秋なりけ
り。」
(源氏物語)

吳楚東南の眺
「吳楚東南拆、乾
坤日夜浮。」
(杜重)

一の谷内裏やし
濱須磨と呼ばれ
る地で鐵拐・鉢
伏の山の後ろに
在る。壽永の帝
の内裏のあとで
ある。

かゝる所の秋なりけりとかや。此の浦の實は秋をむねとする
なるべし。かなしきさびしさ、いはむかたなく、秋なりせばいさゝ
か心のはしをもいひ出づべき物と思ふぞ、我が心匠の拙きをし
らぬに似たり。淡路嶋手にとるやうに見えて、須磨明石の海左右
にわかる。吳楚東南の眺めもかゝる所にや。物しれる人の見侍
らば、さまざまの境にも思ひなぞらふるなるべし。尾上つゞき丹
波路へかよふ道あり。鉢伏のぞき、逆落しなどおそろしき名のみ
残りて、鐘懸松より見下すに一の谷内裏やしき眼の下に見ゆ。其
の代のみだれ其の時のさわぎ、さながら心にうかび、倂につどひて、
千歳のかなしび此の浦にとゞまり、素波の音にさへ愁ひ多く侍る
ぞや。

(笈の小文)

燕村

本名は谷口寅
伴人。攝津國(大
阪府)の人。天明
三年(西曆)癸卯、
年六十八。

鴻臚館

古昔外國の來賓
を接待するため
京師及び太宰府
に設けられた旅
館。

友切丸
源家重代の名

一九 天明調

燕

村

白梅や墨芳しき鴻臚館

春雨や物語り行く蓑と傘

菜の花や月は東に日は西に

鞆走る友切丸やほととぎす

山は暮れて野は黄昏の薄かな

蕭條として石に日の入る枯野かな

二〇 おらが春

小林 一茶

小林一茶
通稱は彌太郎。
俳人。信濃國長
野縣の人。文政
十年(西元一八二八)歿
年六十五。

昔たんごの國普甲寺といふ所に深く淨土を願ふ上人ありけり。
としの始は世間祝ひ事してさゝめければ、我もせん迎、大晦日の夜、ひ



俳諧寺
一茶肖像

春風堂

小林一茶

とく表門を丁々と敲けば、内より、「いづこより」と問ふ時、西方彌陀
佛より年始の使僧に候。」と答ふるよりはやく、上人裸足にてをど
り出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上坐に請じて、きの

とりつかふ小法師に手紙した
め渡して、翌の曉にしかくせよ。
ときといひをしへて、本堂へとま
りにやりぬ。小法師は元日の旦、
いまだ隅々は小闇きに、初鶏の聲
とおなじくがばと起きて、教のご

ふの手紙をとりて、うやくしくいたゞきて讀みていはく、其れ世
界は衆苦充滿に候間はやく吾が國に来るべし。聖衆出むかひし
てまち入り候。」とよみ終りて、おゝと泣かれけるとかや。此
の上人みづからたくみ拵へたる悲しみに、みづからなげきつゝ、初
春の淨衣を絞りて、したゝる泪を見て祝ふとは、物に狂へるさまな
がら、俗人に對して無常をのぶるを禮とすると聞くからに、佛門に
おいては、祝の骨頂なるべし。それとはいさゝか變りて、おのれら
は俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴龜にたぐへての祝盡しも、厄
拂ひの口上めきてそらくしく思ふからに、から風の吹けばとぶ
くず家は、くず家のあるべきやうに、門松立てず、煤はかず、雪の山路
の曲りなりに、ことしの春もあなた任せになんむかへける。
目出度さもちう位也おらが春

一茶
京本願寺に
とし籠りに
のぼる
なぜにおくる
あびるとも
あなたの
煤ぞ
ほんぐわ
ん寺。



一茶の筆蹟

今年みちのくの方修行せんと、乞食袋首かけて、小風呂敷せなかに負ひたれば、影法師はさながら西行らしく見えて殊勝なるに、心は雪と墨染の袖と、思へばく、入梅晴のそらはづかしきに、今更すがた替へんもむつかしく、卯の花月十六日といふ日、久しく寐馴れたる庵をうしろになして、二三里も歩みしころ、細杖をつくく、思ふに、おのれすでに六十の坂登りつめたれば、一期の月も西山にかたぶく命、又ながらへて歸らんことも、白川の關をはるばる越ゆる身なれば、十府の菅菰の干に

一つもおぼつかなしと、案じつゝくる程に、ほとんど心細くて、家々の鶏の時を告ぐる聲もとつてかへせとよぶやうに聞え、畠々の麥に風のそよ吹くも、誰ぞまねくごとく覺えて、行く道もしきりにすすまざれば、とある木蔭に休らひて、瘦脛さすりつゝ、詠むるに、柏原はあの山の外、雲のかゝれる下あたりなどおしはかられて、何となく名残りをしさに、

思ふまじ見まじとすれど我が家かな

おなじ心を

故郷に花もあらねどふむ足の

あとへ心を引くかすみかな

(おらが春)

阿部次郎

東北帝國大學教
授。哲學者。山
形縣の人。明治
十六年生。

二一 生活の中心

阿部次郎

自分はすべての人に勧めるに、その生活の中心をこしらへることを以てしたい。その中心を中心として、日々の生活を調整することを以てしたい。もしその中心を発見することが容易でないならば、自分は生活の中心を求めることを以て、それまでの生活の中心とすることを勧めたい。

諸君が學校にゐる間は、學校の課程が外部的ながら、諸君の生活に一種の中心を與へてゐる。諸君は諸君の生活を調整すべき具體的秩序を手近に持つてゐる。

従つて、たとひ學校をつまらないものと見る人々と雖も、なほこれによつて、自分の生活に一種の具體的内容を與へられてゐることとは、争ふことができないであらう。しかし、諸君が學校を卒業し

て授業時間や、課題や、練習や、試験の束縛を脱れる時、諸君はまた一方に、何となく日々の生活に具體的内容を缺いて、退屈と空虚を覺えることを禁じ得ないであらう。學校に代つて諸君の生活の中心となるものが、直ちには諸君の手に落ちて來ないであらう。多くの人は學校を卒業すると共に、何かをしなければならぬ義務を他人から負はされるか、もしくは自らの感情の中に負ふを常とする。しかし、今日の社會は、我等の卒業を待受けてゐて、直ちに我等に適當な活動の地を與へるやうな社會ではない。さうして、自ら活動の地を造り出さうとするにも、我等は自己の内面に確さの自信を缺き、我等の働きかけるべき社會に對する適當な知識を缺いてゐるが故に、内外兩様の意味に於て、どこから手をつけていゝかがわからなくなる。かくて焦燥と、空虚と、この二つの相反したやうで相近似した感情は、手を携へて我等の生活に迫つて來る。さ

うして我等はあせればあせるほど、益、生活の中心を失つた感じに捉はれなければならぬ。自分は學校を卒業すると、直ちにこの病に捉はれて、學校卒業後の二三年は、まるで何事も手につかなかつた。さうして、この状態を脱却するまでには、自分としては堪へ難いほどの忍耐と節制とを積まなければならなかつた。故に自分は、卒業の諸君を送るに當つても、特にこの點に關する注意を請はなければならぬ。

凡そ人生は短く、人生は長い。爲すべきことを持つてゐるものには、六七十年の歲月は須臾にして流れ去るであらう。しかし、何事にも倦んだ心に取つては、五十年の壽命も、長い退屈な旅と思はれるに違ひないのである。さうしてこの短い生涯を空過しないためにも、この長い一生を退屈せず暮すためにも我等には生活の中心が必要である。自分は中心を缺いた生活の中にある充實

と幸福とを考へることができない。

そこで我等の問題は更に一步を進めて、いかにして生活の中心を發見すべきかといふことに移る。この問題に對する解答もまた固より容易ではないが、自分には、その具體的方法として一つの考案がある。

といつても、それは何も珍しいことではない。最も自分に適しさうな人を選んで、その人の内面的發展を精細に跡付け、その通つた道を自分も内面的に通つて見ることである。約言すれば、自らその師を擇んで、自己の鍛鍊をその師に託することである。師の奴隸とならずに、しかも、師を信頼して、常に、師に照して、自己を發見する途を進むことである。

自分は自分たちの受けて來た纏りのない教育と、徒らに漠然として廣い知識とを思ふ毎に、古人の受けた鍛鍊と訓育とを羨しい

飯山 信濃國長野縣
下水内郡飯山
町
白隠和尚 臨濟宗の高僧。
駿河國(靜岡縣)
の人。明和五年
(一四八)寂。年八
十四。
高社 信濃國(長野縣)
下高井郡 飯山
町の南。
千曲川 長野縣の北部を
貫き、下流は新
潟縣に入りて、
信濃川となる。

と思ふ。自分はこの春、信濃の飯山に行つて、白隠和尚修行の地な
る正受庵を訪うた。庵は高社たかやしろの山を望み、千曲川を望む小丘の上
にあつて、杉の老樹の生ひ繁つた幽邃な墓にある。初め白隠が惠
端和尚をこの庵に訪うた時、惠端は白隠を崖から蹴落したさうだ。
白隠はそれにも懲りずに、惠端に師事したさうだ。さうして、或日
白隠が一つの悟を得て、その坐禪の座から、彼は戸外の石上に坐し
て工夫を積んだといふことである。歸つて來る時に、惠端は縁の端
に出で、遠くから手招きをしながら、白隠を歓迎したさうだ。
自分はその話を聞いて、白隠と惠端との間が羨しくてならなかつた。
自分にも、自分を崖から蹴落してくれる師匠、縁側から自分
を手招きしてくれる師匠があたら、どんなに幸福なことであらう。
師弟とは、與へられるだけ與へ、受けられるだけ受けんとする、二個
の獨立せる、しかも相互に深く信賴せる、靈魂の關係である。弟子

をその個性のまゝに一人の「人」とするところに、師の師たる所以が
あり、その稟性に随つて、一個の獨立せる人格となるところに、弟子
の最も多くその師に負ふ所以がある。「道」の傳統は、何等かの意味
に於ける師弟の關係を経て、始めて内面的に生きるのである。
固より師に就くとは、自分の生活内容を、その師の供給に仰ぐと
いふことではない。我等が愛し、憎み、努め、怒る心は、我等が我等自
身の中に豫め持つてゐなければならぬところである。これ我等
の愛憎や、喜び、悲し、我等の生活を刻々に新たな境涯に漂はしめ、往々
にして、我等の生涯を困惑と、壅塞と、彷徨と、昏迷との境に導く。こ
の窮境を拓き、この關門を透過する努力に於て、我等は始めて、師の
忠言を必要とするに至るのである。我等が師に就いて學ぶべき
ところは、問題の解き方である。途の切り拓き方である。生活内
容を流れ行かしまべき方向である。もし我等自身の中に、豫め生

509

活内容を有することなく、一定の傾向を有することなく、解決を要する問題を有することがないならば、師に就くことは、全然無意味でなければならぬ。故に生活の中心を求め、古人の著作を研究するといふ時、我等の研究の意味は、讀書にあるのではなくて、我等の内面的知覺を開拓して、これを正しい方向に導いて行くところにあることは、繰返すまでもないことである。書を讀むとは、自ら生きることを停止することを意味するならば、また他人の著作を研究するとは、自ら省みる事を中斷することを意味するならば、我等は固よりいかなる場合にも、書を讀むことを、他人の思想を研究することを、生活の中心とすべきではない。こゝに讀書といひ、研究といひ、師に就くといふのは、自ら生き、自ら省みる爲の一つの途を意味するものであることは、明瞭に記憶して置く必要がある。我等が師に就いて學ぶことを要する第一義諦は、行住坐

臥に師の言葉を讀誦することではなくて、何よりもまづ師と同一の勇氣を以て、人生に衝き當ることとなければならぬ。自己の直接經驗を基礎として、人生の疑ひに觸れ、人生の疑ひを解く途を求め、求むることとなければならぬ。

自分は今、最も自分に適し、さうな人を選んで、これを師とすべきことをいつた。しかし、こゝに、最も自分に適する。」といふのは、現在の自分が最も愛好するもの、現在の自分が最も親しみ易いもの——換言すれば、現在の自分の程度を以ても容易に接近し得べきものといふ意味ではないのである。此の如き、師は、たゞ我等をあまりかすもの、現在に於ける我等の偏局した發展を、更に一面的に偏局せしめるものに過ぎないであらう。現在の自分は、自分の本質の一切ではない。我等の本質の中には無限の可能性がある。他日、我等の本質の中から、現在の自分には、思ひも寄らぬ花が咲き

出る日がないことを誰か保証することができよう。我等の師は、我等の本質の中から、これ等の數多き可能性を引出す力があるものでなければならぬ。我等を鞭撻して、常により高い階段を望ましめる力を持つてゐるものでなければならぬ。約言すれば、我等を叱り、我等を引上げ、我等を打碎き、我等を改造するに足るほど、複雑で偉大なものでなければならぬ。此の意味に於て、我等に「無理を強ひる力のないものは、我等の師と仰ぐに値せぬものである。」

(三太郎日記)

榮華物語

系圖と合せて四十一卷。著者未詳。宇多天皇から堀河天皇に至る十五代二百年間の歴史物語。道長の榮華を主題とし、榮華物語といひ、又、一に世繼物語ともいふ。

御堂

法成寺。藤原道長の創建。後一條天皇の治安二年(六二)落成。

攝政殿

藤原頼道。道長の長子。承保元年(三三)歿。年八十三。

殿

藤原道長。萬壽四年(六二)歿。年六十二。

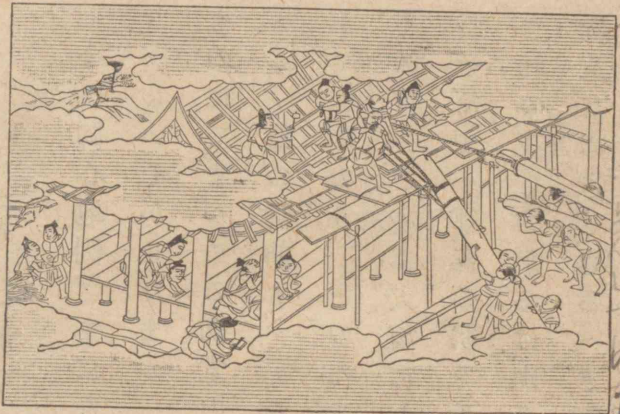
二三 法成寺の造營

榮華物語

今は御心地例さまになりはてさせたまひぬれば、御堂のことをおぼしいそがせたまふ。攝政殿國々まで、さるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂のことを先につかうまつるべき仰事のたまふ。殿の御前も、このたび生きたるは別事ならず、我が願のかなふべきなめり。とのたまはせて、他事なくたゞ御堂におはします。方四町をこめて大垣にして、瓦葺きたり。様々におぼしおきて急がせたまへば、夜の明るるも心元なく、日の暮るゝも口惜しうおぼされて、夜もすがらは、山をたゞむべきやう、池を掘るべきさま、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々方々様々造りつゞけ、御佛はなべでのさまにやおはします。丈六の金色の佛を數も知らず作りなめ、そなたをば北南と馬道^{うまみち}をあけて、道をとゞのへ造らせたまひて、廊

渡殿數多く造らせ給ふ。雞の鳴くも久しくおぼされ、宵曉の御行も怠らず安きいもおぼとのごもらざたこの御堂のことのみ深く御心にしませたまへり。

日々に多くの宮達大臣上達部然るべき人々まありまかで立ちこむ。さるべき殿ばらをはじめ奉りて、宮々の御封御莊どもより、一日に五六百人千人の夫どもを奉るも、人の數おほかることをばかしこきことにおぼしたち、國々の守ども地子官物はおそなはれども、只今はこの御堂の夫役材木檜皮瓦など多くまゐらするわざを、我も我おほかた近きも遠きも参りこみて、品々



法成寺建築古畫

もと競ひつかうまつる。

方々あたりくにつかうまつる。



法成寺の落成

或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかりなみゐてつかうまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見あぐれば、工匠ども二三百人のぼりゐて、大きな木どもには太き綱をつけて、聲を合せて、えさまさと引上げさわぐ。御堂の中を見れば、佛の御座つくりかゝやかす。板敷を見れば、木賊椋の葉などして、四五十人手ごとになみゐて磨き拭ふ。檜皮葺壁塗瓦作なども數をつくしたり。また年老いたる翁などの、三尺ばかりの石を、心にまかせて切りとゝのふるもあり。

大津
近江國(滋賀縣)に在る
 梅津
山城國(京都府)葛野郡、大津と共ニ材木の集散地
 須達長者
印度マカダ國舎衛城の長者
 祇園精舎
釋迦の說法した寺院、印度の舎衛國に在つた
 冬の室・夏の殿
「淨飯王爲太子造三時殿、一者暖殿以擬隆冬、第二涼殿擬夏暑、其三殿擬春秋二時寢息」(佛本行集經)

池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼりたち、また大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫びの、しり引きもてのぼる有り。賀茂川の方を見れば、筏といふものに樽材木を入れて、棹さして心地よげに謠ひの、しりてもてのぼるめれ。大津梅津のこ、ちするも、西は東といふことはこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせてゐて來れど沈まず。すべて色々様々いひつくしまねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舎造りけむもかくやありけむと見ゆるを、冬の室夏の殿、おの、く、こと、く、なり。かゝる御勢にそへて、入道せさせたまひて後は、いと、勝らせたまへりと見えさせたまふにも、なほなべてならざりける御有様かなと、近う見奉る人はたふとみ、遠う見奉る人は遙にをがみまらす。今はこの御堂のあたりの木草ともならむと思へる人のみ多

長谷寺
大和國(奈良縣)磯城郡初瀬に在る
 弘法大師
姓は佐伯、出家して空海と名乗る。眞言宗の開祖。讃岐國(香川縣)の人。承和二年(四九一)歿、年六十二
 御日記
聖德太子御手印緣起
 王城より
法成寺は宮城の東に在る

かり。そなたさまに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、この御堂のものをもて運ばせ、河も水すみて、快く浮べもてまゐると見ゆ。なほなべてこの世のことは見えさせたまはず。まづは、先年に長谷寺にある僧の御祈禱をいみじうして寝たりける夢に、大きにかめしき男の出で來て、何かかく殿の御事をばともかくも申したまふ。弘法大師の佛法興隆のために生れたまへるなり。」とぞ見えさせたまひける。また天王寺の聖德太子の御日記には、王城より東に佛法弘めむ人を我と知れ。」とこそは書きおかせたまふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。

大鏡

八卷、著者未詳。文徳天皇から後十四代百七十五年間の歴史物語。

醍醐の帝

第六十代。

時平

姓は藤原。延喜九年(癸卯)歿、年三十九。

菅原

名は道真。延喜三年(癸丑)歿、年五十九。

二三 菅公の大臣

大

鏡

醍醐の帝の御時、時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若くておはします。菅原のおとゞは右大臣の位にておはします。その折みかど御年いと若くおはします。左右大臣に世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、その折、左大臣御年二十八九ばかりなり、右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしましけむ、ともに世の政をせしめ給ひしほどに、右大臣はざえ世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきても殊の外に賢くおはします。左大臣は御歳も若く、ざえも殊の外に劣り給へるによりて、右大臣の御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御爲によからぬこと出で来て、昌泰四年正月二十五日、太宰権帥になし奉りて流され給ふ。

昌泰四年
皇紀一五六一年

この大臣子ども數多おはせしに、女君たちは増取し、男君たちは皆ほどくにつけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君たち慕ひ泣きておはしければ、小さきはあへなむ。」とおほやけも許さしめ給ひしかば、ともにて下り給ひしぞかし。帝の御掟きはめてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣さざりけり。方々にいと悲しく思召して、御前の梅の花を御覽して、

東風吹かば句おこせようめの花

あるじなしとて春なわすれそ

また、亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれはみくづになりはてぬ

君しがらみとなりてとゞめよ

なきことによりてかく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やがて

亭子の帝
第五十九代宇多
天皇。

山崎
山城國(京都府)
乙訓郡に在る。

山崎にて出家せしめ給ひて都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくくと

隠るゝまでもかへりみしはや

また、播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふ處に御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らせ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改、

一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし着きて、ものあはれに心細く思さるゝゆふべ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にも立つ煙

なげきよりこそもえはじめけれ

又、雲の浮きてたゞよふを御覽しても、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來る

かげ見るときはなほ頼まれぬ

さりともと世を思しめされけるなるべ

し。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水の底までも

きよきこゝろは月ぞ照さむ

これいとかしこくあそばしたりかし。

げに月日こそは照し給はめとこそはあ

めれ。

筑紫におはします所の御門も、かため

ておはします。天貳の居處遙なれども、

樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じ

やられけるに、またいと近く觀音寺とい



菅公の左遷(北野天神縁起)

天貳の居處
太宰府。

文集
白氏長慶集、
白居易
號は樂天。唐の
詩人。大中元年
(西紀六四七)歿、年
七十五。



(起縁神天野北)衣御の賜恩

ふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめし
て作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纒看瓦色。

觀音寺只聽鐘聲。

これは、文集の白居易の『遺愛寺鐘欵枕聽、
香爐峯雪撥簾看』といふ詩にもまさざ
まに作らしめ給へり。とこそ昔の博士
どもは申しけれ。

またかの筑紫にて、九月十日菊の花を
御覽じけるついでに、まだ京におはしま
しし時、九月の今宵、内裏にて菊の宴あり
しに、この大臣の作らせ給へりける詩を、
御門かしこく感じ給ひて、御衣賜り給へ

りしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞその
をり思召しいでて作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼。

秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。

捧持毎日拜餘香。

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。

このことども、たゞちり／＼なるにもあらず、かの筑紫にて作り
集めさせ給へりけるを、かきて一卷とせしめ給ひて、後集と名づけ
られたり。またをり／＼の歌をかきおかせ給へりける、おのづか
ら世にちりきこえしなり。

また雨の降る日、うちながめ給ひて、

あめの下かわけるほどのなればや

着てしぬれぎぬひるよしもなき

やがて、かしこにてうせ給へり。

後集
菅家後集。

時代の概観

二四 中古の文學

平安朝に至りて、平假名の使用始めて自由となれり。是に於て韻文としての和歌、散文としての物語は、互に相前後して著しき發達をなし、我が模範文學を大成せしむることを得たり。而して和歌の發達と之に對する翫賞とは、其の他の文學の根柢をなしたるが如し。當時の朝臣は専ら支那の詞賦を學習せしが、和歌は古來の純國民的文學として亦相伴ひて行はれしのみならず、女子は専ら和歌を弄べり。故に長歌は早く衰へたれども、短歌は世を逐うて、愈、其の流行を持續し、延喜の朝に至り、始めて和歌の勅撰集を見たり。之を古今和歌集とす。主として萬葉集以後の短歌及び當時の歌人の篇什を集めたり。萬葉の歌には直覺の情を歌ひ、眼前の景色を直敘せるもの多きに反し、古今のは俯仰感懷、人生の無常

和歌の勅撰
(古今和歌集)

を敘し、浮世の夢に似たるを説き、六朝思想と佛教思想との短歌中に移植せられたるかの觀あり。故に萬葉は敘景の歌に富み、古今には理窟の歌多し。修辭上の進歩亦著しく、譬喩、緣語、掛詞等最も巧妙に使用せらる。奈良朝と平安朝との國語の變遷は、亦其の歌調の相違を感じしむること尠からず。萬葉は初心なる趣ありて簡古の味に富み、古今は巧緻の境に進みて勁健の義を失へり。是亦時代の反映と見るべし。自然と人事との融合は此の時代に至りて全く完成し、春花秋葉、雪月の美、歌に詠ずべき題目も一定し、春の鶯、夏の郭公、秋の蟲の音、鹿の聲、四時の景物に伴ふ鳥獸までも自ら定りて、春の花盛りには人生の樂しき朝を思ひ、萩の上に置く露には儂なく消ゆる運命を悲しむ等、和歌の約束は悉く確立して、後の文學は皆之に則るに至れり。古今集以後の撰集には、後撰集、拾遺集あり、相並べて三代集と稱す。又爾後の後拾遺、金葉詞、花千載

八代集

歌物語

日記

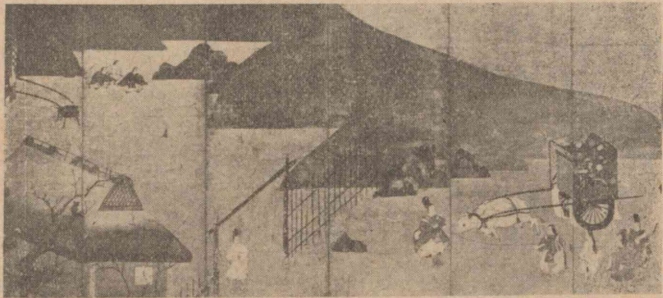
新古今集と併せて八代集と稱せり。

國民の和歌に對する嗜好は、古來の名歌に附するに種々の物語を以てす。萬葉集卷十六の有由緒歌、伊勢物語、大和物語の如き、實は歌を主とせる種々の説話を集めたるものなり。余は之を名づけて歌物語といふ。是等歌物語は歌によりて説話を臚列し、人事の境遇を述べたるものなるが、そを一身の經歷に繋がんか、即ち日記となり、若し之を綜合して種々の人物を藉りて脚色を施さんか、即ち物語となる。

日記には蜻蛉日記を最も舊きものとして、和泉式部日記、紫式部日記等あり。物語には宇津保物語、落窪物語、源氏物語、狹衣物語等を最も著名なるものとし、名のみ傳はりて、今日に亡びたるもの頗る多し。男子が主として支那詞賦の模作に力めたる間に、女流の手によりて、純國文學の發生は成就せられしなり。

源氏物語

源氏物語五十四帖前篇は光源氏を主人公とし、後篇の宇治十帖



源氏物語風關屋圖 (宗達筆)

は光源氏の子、薰大將を主人公とす。全篇貫通の脚色整然紊れず、宮中に入出し、年中行事に参加し、虚榮と富貴とにあこがれし上流の摺紳貴女は、最もあらはに描寫せられたり。源氏の大作家たる所以は、亦其の自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點に在り。人事の描寫の後には、必ず自然の背景を添ふ。即ち和歌の趣味の上に立ちたるものにして、地の文には、處として和歌の景情を含まざるなし。人事と自然とを融合せる詩的思想は、こゝに至りて最大の發達をなす。其の文冗長にして詳細、上古文の簡朴にし

枕草子

て莊重なる點は見るべからずといへども、嫺々として風に靡く、女郎花の如く、柔輒、艷麗正に其の内容に恰當せり。こは平安朝女流文學一般の上にも言ひ得べき事とす。

源氏物語と相並びて雙璧と稱へらるる、枕草子は、古來隨筆の嚆矢と稱せらる。然り、隨筆なり。歌人として自然と人事とを觀察せる隨筆なり。其の着眼の奇警なる、其の句法の輕妙と相俟ちて千古不朽の文辭を成せり。忽ちにして人事、忽ちにして自然、變化錯綜の妙味は句法の上にも内容の上にも之を認め得べく、歌人が一つの題詠に際して、右往左往に詩想を馳するの概あるを見る。其の自己の經歷を敘するや、全くかの日記の文に均し。故に此の隨筆も、亦歌物語を根據として發達し來れる平安文學の例には漏れざるなり。

此の時代初期の歌物語は、一變して日記となり、小説物語となり

大鏡

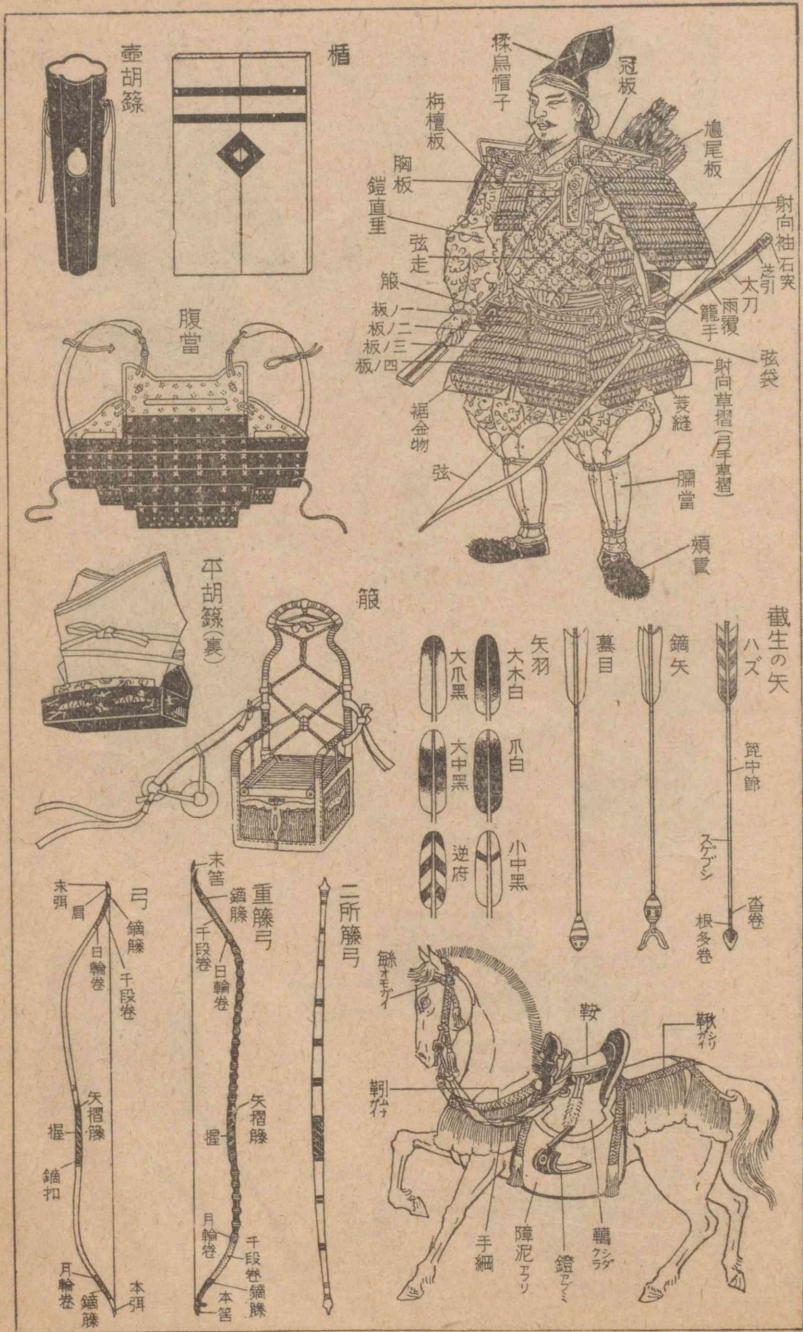
今昔物語

たるが、再變しては歴史物語となれり。これ實に當然の推移といふべし。歴史物語には、榮華物語と大鏡とあり。何れも藤原氏の歴史を敘して道長の全盛時代を寫せり。大鏡が先づ帝王の本紀を掲げ、次に攝關の列傳を掲げしが如きは、全く支那の紀傳體の歴史の體裁を襲へるなり。

是等歴史物語の外に、各種の奇談珍話を類聚せる、今昔物語あり。

(芳賀矢一氏の文に據る)

新制國語讀本卷九終

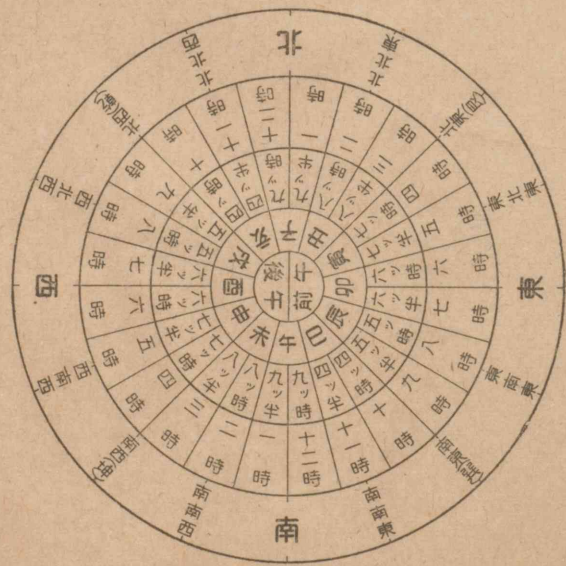


官職表

(大寶令を本としたるもの)

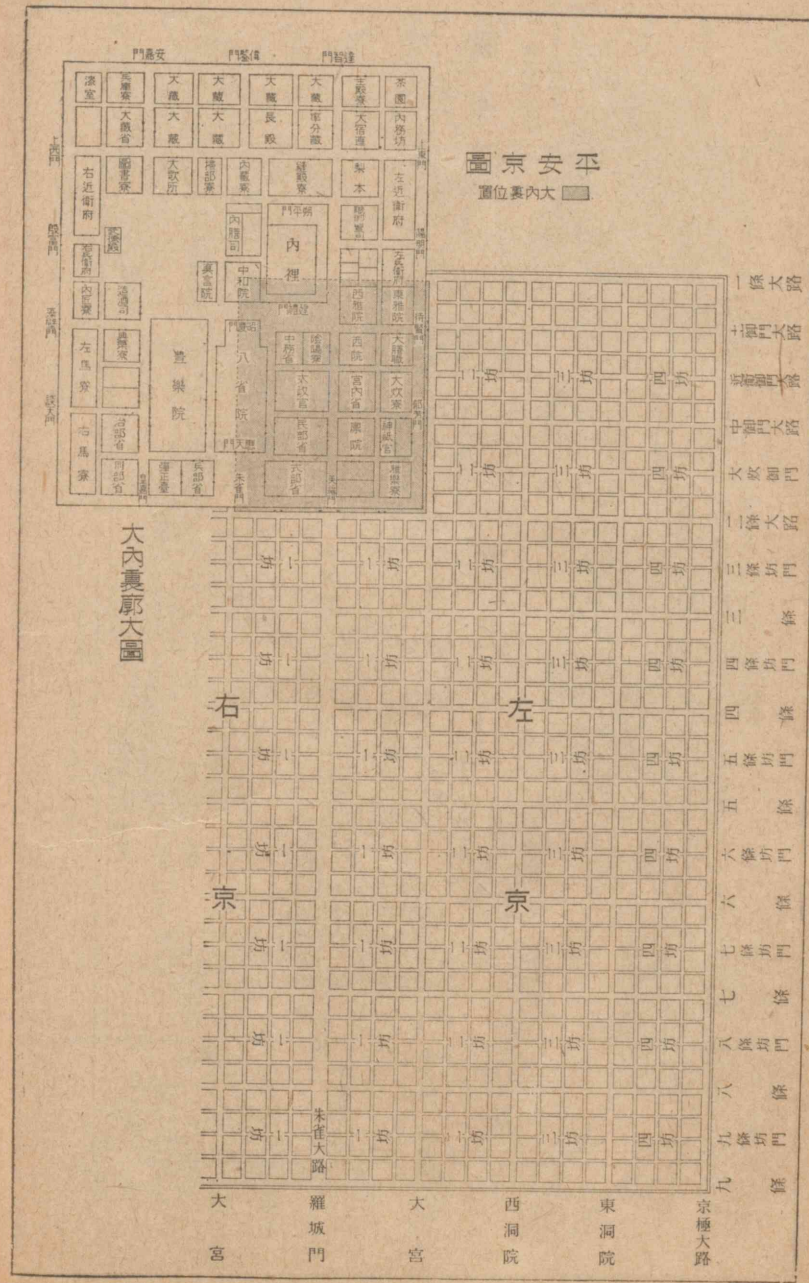
其他	官	方	地	察	警	官	武	八	太	神	官	官
藏人所	國司	大宰府	右左京職	檢非違使	右左馬寮	右左兵衛府	右左衛門府	彈正臺	省	伯	祇官	官等
頭	守	帥	大夫	別當	頭	同	督	大將	尹	卿	長官	長官
五位	介	小大貳	亮	佐	助	同	佐	中將	小大弼	小大輔	次官	次官
六位	小大掾	小大監	進	尉	允	同	尉	將	小大忠	小大丞	判官	判官
	小大目	小大典	屬	小大志	小大屬	同	小大志	將曹	小大疏	小大錄	主典	主典

方位及及びの時圖



平安京圖

大内裏内位置



願望	場所・方向	添加	重きを言 外に含ま しむる	禁止	反語						
なむ	ばや	へ	に	さへ	すら	だに	な…そ	な	か	キ	
世の汚をば知らであらなむ	心あらむ人に見せばや。	前へ進め。	机によりかゝる。	梓弓おして春雨けふ降りぬあすさへ降らば若菜つみてむ	我身すら容れられず。	思ふこと筆にだに残さばや。	悪事をなせそ。	我をな忘れそ。	ゆめ忘るな。	唯か知らざらむ。	豈我のみならむキ

係				件						
結				確定						
こそ	なん	か	や	ぞ	ども	ど	ば	とも	と	
人こそ見えね。	善くなむ見ゆる。	いづれかまされる。	花や散りし。	見てぞ思ふ。	見れども見えぬ。	美しけれどとげあり。	波風止まねば同じところ にあり。	品よければ買ひぬ。	問へば答へ、問はざれば 答へず。	雑にかくと筆も及はず よろづよ經とも色はかは らじ。

語				尾								
がてら	がまし	らし	ふる	さぶ	ばむ	めく	げ	み	さ	へ	さま	はら
散歩がてら。	をこがまし。隔てが まし。	男らし。女らし。	學者ふる。	神さぶ。	けしきばむ。汗ばむ。	時めく。春めく。	にくげ。心ありげ。	青み。深み。	行くさ。歸るさ。	ゆくへ。片へ。	神様。	殿ばら。奴ばら。

紛れ易き品詞(文語)

ね		らむ		なり				たり			語					
助動詞	完了動詞	打動詞	消動詞	時の助動詞	推量の助動詞	形容動詞の語尾	詠歎詞	助動詞	指動詞	動詞	形容動詞の語尾	指動詞	時の助動詞	種用法別	用	例
とく行きね。	人こそ知らね。	生けらむ。	散るらむ。	山紫に水明らかなり。	蟲の聲すなり。	日はくるゝなり。	花の美しきなり。	彼は軍人なり。	事業愈なりぬ。	水洋々たり。	父たり、子たり。	花咲きたり。				
ばや		な		なむ				ぬ		しか		語				
問の助詞	條件と疑	助望詞	助動詞	助動詞	禁止詞	係の助詞	助望詞	未來完了助動詞	打動詞	完了動詞	過去の助動詞と疑問の助詞	過去の助動詞	種用法別	用	例	
心あてに折らばや折らむ。	心あらむ人に見せばや。	知らじな。	花散りなば。	ゆめ忘るな。	花なむ咲く。	花咲かなむ。	花咲きなむ。	こぬをまつ。	花咲きぬ。	君はこの本をよみしか。	驚るゝまでこそ戦ひしか。					

助詞の用法(文語)

願望		場所・方向		添加		重きを言外に含ませしむる		禁止		反語		疑問		種用法別	
なむ	ばや	へ	に	さへ	すら	だに	な…そ	な	か	や	か	や	助詞	用	例
世の汚をば知らであらなむ。	心あらむ人に見せばや。	前へ進め。	机によりかゝる。	梓弓おして春雨けふ降りぬあすさへ降らば若菜つみてむ。	我身すら容れられず。	思ふこと筆にだに残さばや。	悪事をなせそ。	我をな忘れそ。	ゆめ忘るな。	唯か知らざらむ。	豈我のみならむや。	有るか無きか。	有りや無しや。		
係結		件確定				係假定				種用法別					
こそ	なん	か	や	ぞ	ども	ど	ば	とも	と	ば	助詞	用	例		
人こそ見えね。	善くなむ見ゆる。	いづれかまさされる。	花や散りし。	見てぞ思ふ。	見れども見えず。	美しけれどとげあり。	波風止まねば同じところあり。	品よければ買ひぬ。	問へば答へ、問はざれば答へず。	繪にかくと筆も及ばず。よろづよ經とも色はかはらじ。	急かざばぬれざらまし。	明日晴天ならば遠足せむ。			

語尾										接頭																							
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	ち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	い	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語



昭和十二年七月廿六日
 昭和十三年一月十五日
 昭和十三年一月十五日
 印刷
 發行
 修正再版印刷
 修正再版發行

新制國語讀本

定 價
 卷一——卷九 各六拾錢
 卷十 各五拾八錢

新東條國文

不許複製

編者
 發行者
 印刷者

東 條 操
 東京市神田區神保町一丁目一番地
 株式會社 三 省 堂
 代表者 龜井豐治
 東京市蒲田區仲六郷一丁目五番地
 株式會社 三省堂蒲田工場
 代表者 喜多見昇

發行所

（東京市神田區神保町一ノ一）
 株式會社 三省堂
 振替口座東京三一五五五
 （大阪府西區阿波座下通二ノ六）
 株式會社 三省堂大阪支店

三学級二十番
金村高彦